

第 I 部

社会の地理学的研究の視点 — フランス地理学から —

まえがき

第 I 部では、筆者の地理学的研究の出発点において、そして今もなお、重要な思想的基盤をなしている社会地理学の在り方を巡って、社会の地理学的研究において大きな水脈をつくりあげてきたフランス地理学派に的を絞って論じる。それは、社会地理学のレゾンデートルを求めての探究ともいえる。

人文地理学は、基本的には人間探究の学であると考ええる。より正確に言えば、それは場所、地域、空間といった自然という基盤の上に人間の活動や思いが塗り込められた「広がり」における、あるいはそれと係わる人類の活動に注目する人間の学であるといえよう。そうした人間性の探究を地理学に導入した最初の一人がフランス地理学派の祖と仰がれるヴィダル・ド・ラ・ブラーシュであった。彼は、人類集団の労作は自然環境と密接な関係にあることを認め、「地的統一」概念をもちいながらも、人類の自然への積極的な働きかけにも注目し、そこに歴史精神を吹き込むことによって地理学に「人間性」への視点を導入することに成功した。彼の後継者たちは、この師の思想を継承しながらも、自らの信じるるところに従ってそれぞれの方に展開を遂げた。ブリューヌ (J. Brunhes) は、人文地理学を基礎的人文地理学と歴史の地理に二分し、心理的要素を介在させることによって地理的事象を関連づけて体系化しようとした。一方、人文地理学は人類集団を地理的環境との関連において研究すると規定し、控えめな地理学に身を置いたドゥマンジュオン (A. Demangeon) は、人びとの生活様式、なかんずく集落研究をその中核に据えた。社会学との接点を求めたソール (M. Sorre) は、技術総体という考え方と人類生態学的方法を用いて、生活様式概念に変革という概念を導入した。第 1 章では、これらの研究者を巡って社会地理学理論に光を当て、その理論構築に資する。

第 2 章では、フランス地理学界で異端視されてきたブリューヌの理論の問題点を検証するとともに、最も早く社会地理学の立場を表明した研究者としての彼を正当に評価することを試みる。また、人類の社会性・歴史性に注目し、その先に社会地理学を展望しながらも、自ら地理学に限界を設けたためにそこに辿り着けなかった彼の論理と方法論における問題点を掘り下げ、その理論の止揚の方向を探ることも試みる。

第1章 社会の地理学的研究の視点

— フランスの場合 —

はじめに

19世紀から20世紀への転換の時代に、フランス地理学派の始祖ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは地理学の対象としての人類の社会性を喝破した¹⁾。以来、フランスをはじめ多くの国々において、社会地理学というタイトルあるいは社会の地理学的研究という名目で多くの研究が試みられてきた。しかし、それぞれの国柄や学説史的背景を異にし、社会の受けとり方は必ずしも一様ではなかった。そこには混乱さえみられる。

おおまかに整理すると、次の五つの傾向が指摘される²⁾。①特定の社会の地誌的研究、社会地誌ともよぶべきもの³⁾（イギリス学派やフランス学派に多い）、②文化景観ないし社会景観の研究を行うもの⁴⁾（ドイツ学派が中心をなす）、③もっぱら社会学的事象に地理的アプローチを行うもの⁵⁾、④経済地理学をホモ・エコノミクスの思考より解放しようとする社会経済的研究⁶⁾、⑤人文地理学にとってかわろうとするもの⁷⁾である。

本稿では、フランス地理学派を代表する4人の地理学者に焦点をしぼり、彼らが人類の社会性をどのようにとらえ、社会の地理学的研究のレゾン・デートルをいかに据え、それらの原理をいかに展開し、どのような成果をもたらしたか、その問題点はどこにあるのかなどについて分析を試みる。そして、今後のあるべき方向について示唆をえられればと願っている。

なお、フランス地理学派の社会集団に関する研究については、既に松田信の「構造と機能」という観点からの綿密な分析がある。しかし、広義な社会そのものと集団はおのずから異なり、また研究の視点も異なる。

1 2人の社会学者——ル・プレーとルヴァスール——

フランスにおいて、地表空間を舞台とする人類の地理的活動における社会性の局面に最初に接近したのは地理学のスペシャリストではなかった。それは、1789年のフランス大革命を契機として惹起された政治的・社会的混乱、それと踵を接して進行する産業革命がもたらしつつあった産業社会と賃労働者の出現といった経済・社会構造の大きな変革のうねりを目前にして、フランス社会の社会経済的構造や政治経済的構造の解明にうちこんだ2人の社会学者、ル・プレー（F. Le Play, 1806～82年）とルヴァスール（E. Levasseur, 1821～1911年）であった。

1.1 ル・プレー

社会改革の急務を痛感したル・プレーはその方法を樹立するために、「ヨーロッパの労働者たち」⁸⁾をはじめとする一連の「社会科学」⁹⁾シリーズにおいて、社会現象の背後にある社会・経済構造の合理的、体系的な解明を試みた。彼は社会の最も基本的な単位として「家族」をとりあげ、三つの類型（「原始家族」〈famille souche〉、「家父長制家族」〈famille patriarcale〉、「不安定家族」〈famille instable〉）を抽出した¹⁰⁾。それらは八つの労働形態に要約される経済制度¹¹⁾と密接に関連し、その労働は場所の性質と深いかわりをもつとした。そして、ヨーロッパにおける3大地帯（アジアステップ地帯・沿岸地帯・森林地帯）と各家族類型との間に有意な関連性のあることが指摘された。こうしたローカルな社会型と場所（環境）の不即不離性は、後述するヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの生活様式論において、地理学的概念化がほどこされて登場するが¹²⁾、ル・プレーのこの指摘が19世紀の中葉になされたということの意義は大きい。なお、両者間の直接的な影響は云々されえない。それというのも、ル・プレーの後継者トゥルヴィル（H. de Tourville）やドゥモラン（E. Demolins）たちがより直截に自然環境と社会構造の関連性を強調したために、自然環境決定論の印象を与えたこと¹³⁾をヴィダル・ド・ラ・ブラーシュが嫌ったものと考えられる。むしろ、ル・プレー的社会観は英・米の土地で花開いた¹⁴⁾。さらに、「原始家族」と「家父長制家族」によって特色づけられる「単純社会」(société simple)と、不安定家族からなる「複合社会」(société compliquée)という二つの社会類型が指摘される。こうして、家族、場所、労働が社会構造を解明する主要な関連要素として分析される。こうした視点は社会経済学的アプローチであるとはいえ、地理学が看過しえないところである。

私的生活の頂点であるとともに、地方自治の第一階梯でもある生活共同体的な小教区 (paroisse)、地方政府としての農村県と都市コミューン (都市の中心機能など)、州機構 (その非自立性と四つの機能)、国家 (その機能と規模) にいたる政治地域の組織・機能が相互に関連あるものとして論じられている (注10, 390-478)。われわれはその機能的分析に注目すべきであろう。しかし、この方面の本格的研究が行われるのはずっと遅れ、メイニエ (A. Meynier) のコミューン研究¹⁵⁾ をまたねばならない。

1.2 ルヴァスール

歴史家とも経済学者ともいわれるが、なによりも社会学者たらんとしたルヴァスール¹⁶⁾ は、リベラリストの立場より社会問題の解決、「安寧」(bien-être) の条件を求め、政治経済学・歴史学・地理学を三本柱として、それに統計的手法を加えて、社会構造の解明に当たった。その人口研究は地理学 (ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの人口の不均等な分布とその形成の研究¹⁷⁾ など) や社会学 (デュルケーム (E. Durkheim) の社会的密度の増大と人口増加の関連性の研究¹⁸⁾ など) に大きな影響を与えた。

自然を富の源あるいは道具とみなし、人類はその叡智と労働とをもちいて富を創造し、社会を形成し、土地を住みよくするために種々の設備と制度を構築する。すなわち、人類は主体的に地域を構造化している (彼はヴィダル・ド・ラ・ブラーシュよりはっきりとこの点を主張している)。そうしてできあがったものを理解するには、その一連の「アンサンブル」を破ることなく、その全体を体系的に (特殊記述と定率的に) 認識すべきであると彼は主張した。こうした観点から、彼は地理学を他の社会科学に近づけようとしたが、地理学界ではヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの評価 (注16, 87-89) でもわかるように、彼の地理教育面の功績は認められても、その理念は直接的には受け入れられなかったようである。だからといって、そのすぐれた主張が忘れ去られてよいわけではあるまい。第二次大戦後、フランス地理学界においてもようやくヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの考え方の墨守やフェーブ (L. Febvre) 流の解釈に終始するのではなく、積極的に始祖をのりこえようとする¹⁹⁾ 動きがおこってくるが、ナルディ (J. P. Nardy) のルヴァスールの再評価もその潮流にのるものといえよう。

2 人類は社会的存在である——ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ——

2.1 19世紀の状況とヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの独自性

19世紀のフランス地理学をとりまく状況はどうであったろうか。人間の性格や態度を決定づける要因または材料として、気候的要素をとりあげるモンテスキュー (C. L. de S. Montesquieu) 流の自然環境決定論が哲学界に蔓延していた。一方、歴史の領域ではフェーブルが指摘するように (注13, 33-40, 109-116)、ビュッフォン (G. L. L. Buffon)、ミシュレー (J. Michelet) といった自然と人間を正しく観察した人々もいたが、多くの人々は歴史の領域の自然的基盤やその境界の必然性を説明する道具だての一つとして地理学をとりあげるにすぎなかった。

そうした貧しい状況にあって、前述した社会学者たちの実証的研究とともに、地質学の分野においてポーモン (S. de Beaumont)、ラッパラン (A. A. de Lapparent)、マルジュリー (E. de Margerie) らによりフランスの自然的地域 (région physique) の科学研究が進められていた。しかし、それらの成果は当時の地理学界にとり入れられるところまでは行かず、大学での地理教授者たちはリッター的世界にとどまっていた。

こうした状況のもとで、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ²⁰⁾ はラッツェルを中心として隆盛なドイツ地理学派から多くの学問的成果を吸収した。19世紀ヨーロッパを風靡したダーウィニズム (注16, 27. 注17の上巻, 解説13-14) は、ドイツ生物学界において有機体的自然観と結びついて、ヘッケル (F. Haeckel) による生物生態学として展開された²¹⁾。人類の恣意・不測性を地理学から排し、人類を生物生態系の一環として位置づけ、自然の人類への働きかけを分析することによって一般地理学を体系化しようとしたラッツェルは、この方法を人類にもあてはめた。おなじく、「人類の地理的労作は……本質的に生物学的である」(注17の下巻, 284-285) として、生物生態学的方法を重視したヴィダル・ド・ラ・ブラーシュであったが、一方「人類の生態学は生物の生態学ほど単純でない」(注17の下巻, 302-312) ことにも注目して、むしろ人類の創意性を強調した。人文的事象はすべて歴史的所産であり、人類と環境との間に恒常的な関係はありえない。人類史は、人間が自然環境だけでなく文明の影響 (文明の形態は社会的条件を創出する…注20の (iii), 22頁) と外圍の社会的環境 (商業活動と交通による接触など) と伝統のもとにあって、能動的に「自らの生活を保証し環境を彼の用に役立てる」(注17の上巻, 237頁) ような生活様式を確立することを雄弁

に物語っている。こうした人類の歴史性と能動的・作用と社会的環境の影響に注目するならば、生物生態学的方法は歴史的アプローチと人類の主体的な活動や自然への働きかけの研究によって補完されねばならないことは明らかである。これがヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの出発点であった。

社会集団・社会的諸事象 生物生態学は動植物相をその群落において観察する。人類の生態学もまさしく、個としての人間や抽象的な人類一般をとりあつかうのでなくて、大小さまざまな集団やその成員たる人間を研究する。彼は、「人類が地表に働きかけるのは集団を介してであり」、「地理学的諸条件の影響は社会的諸事実を媒介として発揮される」（注17の上巻，88頁，100頁）という命題をはっきりと地理学の基底に据えることに成功した。

ここで、集団という社会学的概念を地理的にはどのように把握するのか、そして社会的諸事実が地理的諸事実とどのようにかかわるのかを質しておかねばなるまい。彼は環境の地理的意味を究明する過程で、「地理的見地よりすれば、共住（cohabitation）という事実、すなわち特定の空間の共用は総ての基礎である」（注17の上巻，215頁）と述べ、集団を「空間の共用または共同」において認識しようとした。さらに、生物界における集合の形式が分封の小集団を単位としているように、人類社会においても空間の共用により環境総体と深く結びついた「郷土」（*foyer*，例えば古代エジプトのそれ）のうえに成り立つ小集団、それを基礎としたより大きな集団、部族・国家・文明が成立していることが有機体論的な口調でもって語られる（注17の上巻，87-116，下巻，126-130）。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュはこのような一定のテリトリーをもつさまざまなランクの集団を地理的集団としてとりあげ、それらの人口の分布・密度・位置（孤立，連続，接触）・集合の様式（分散と集中，村落と都市，文明）などについて環境総体との関連性を中心に論じている（注12，注20のiv頁）。

人類の社会的な生活は当然、社会的諸事象をうみだし、それらは地理学にとり決して無縁ではありえない。たしかに、それらには地理学とはあまりに間接的な関係しかなくて地理学が問題とする余地のないものがあるにしても、地理学がそれらと多数の接点を有していることにはかわりがない。こうした点より、地理的条件が社会的事象に深く刻みこまれたケース（例えば東南アジアの気候と水利制度・耕作様式が社会制度に及ぼしている影響）と逆のケース（例えば、西インド諸島におけるモノカルチャーの人為的卓越）をとりあげ、地理的諸事象と社会的諸事象の間に深い相互作用のあること（もっとも前者のケースに重点がおかれているが）が問題とされる。

社会的諸事象，例えば「制度とか風習は物象的な形をとらないが、それは人類がそ

の生活に採用している社会制度の影響のもとで様式だてている対象（自然または生活様式）と密接に結ばれている」（括弧内筆者注、注20の（iii）、15頁）のであって、「こうした人類の製造のさまざまな表現（生活様式・文明）が社会的諸事象に関する地理的研究にどれほど正確な補強をもたらしてくれるかは容易に判断される」（括弧内筆者注、注20の（iii）、14頁）。すなわち、「生活様式」に社会的諸事象と地理的諸事象のかかわりが一点に集中して表明されている。この研究こそ、「人類の社会生活における大地の地理的作用を翻訳する」（注20の（iii）、22頁）ことといえるとしている。すなわち、それは社会の地理学的研究の核心をなすと。

生活様式の研究 生活様式（genre de vie）²²⁾とは、ブラーシュによれば一定の領域を共用する集団が環境総体の影響を受けつつ、そこからとった材料や要素の力を用い、自らの創意と努力によってその生活を保証し、環境を彼らの用に役立てる方法的なものの組み合わせであり、それは種々の生活装備とも呼ぶべき物象系をとおして把握される。この地方的相観のうえに組織的・永続的に刻印されてゆく生活様式は、単なる景観の寄せ集めとしてでなく、組織的なものとしてそのアンサンブルな姿において統一的に理解されることがなによりも要求される。なぜならば、それらは別々なところから出てくるのではなく、かなりの部分は創意と意欲が因ってくるところのその社会の体系に帰着されるからである。

このローカルな様式はその環境総体と深く結びつき、生態学的連鎖の一環として適応と改変（modifier）を行いつつ、その運転に参画している。伝統的社会においては、人類はエンデミズムといってよいほど環境に深くとらわれている。そこでは、永続性と停滞が顕著である。一方、能動的で開放的な社会に目を転ずれば、変化と進歩が力強い印象を与え、人類が自己の用に足すべく環境を積極的に修正し、地域を人文化（humaniser）している。

生活様式概念は複合性と社会的環境という概念を引き出す。ローカルな生活様式は共労または分業の関係（協調と反発の両作用が働く）にある同質または異質の集団よりなる一つの社会組織を構成し²³⁾、それはさらに大きな集団へと結合または統合され、さまざまなランクの生活様式が形成され、ついに文明という究極的な生活・文化体系の形成に至る。この文明は広い地域にわたって、ライトモチーフ（Leitmotiv、示導動機）とも呼ぶべき光を放ち、生活そして景観を様式だてている。それは力強い影響力と自己運動能力とによって、社会的環境としてローカルな生活様式に影響を与える。なお、この社会的環境には外からの影響とともに、人類の慣性²⁴⁾がもたらす伝統という内部的作用も含められよう（内部からの変革の動きについてははっきりと述べて

いない)。以上がヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの生活様式論の要点である。

生活様式の研究は地誌的ないし民族誌的な研究の積み重ねをまっけて、より高い統合へと導かれるならば、それは一般地理学につながりうるとしている点も忘れてはならない。すなわち、生活様式の研究は特殊性に閉じこもるのではなく、一般性へと開かれていなければならないと。

なお、環境と密着した生活様式論は伝統的社会には通用するかもしれないが、開放的・工業的社會や都市に対しては適用されえないとする見解がある²⁴⁾。それについては、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュがそうした傾向を認めつつも、それは程度の問題であって、それぞれが地域的複合組織であるという点にはなんらかわりのないとい述べ、晩年には、ジュイアール (E. Juillard) もいうように²⁵⁾、都市や工業化社会にも注目していたことをつけ加えておこう。

小結 ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの生活様式論は、次のような社会観をわれわれに与えてくれる。(1) それは地的基盤を共用する社会の生活組織であり、自然環境とともに社会環境とも関連づけて研究される必要がある。(2) 郷土 (foyer) から文明に至るまでのさまざまなランクの社会と対応している。(3) 景観を体系化しているものは人類の意志であり、具体的には文化である。(4) 「社会」には、質的に伝統的・閉鎖的社會から都市・工業化社会という開放的社會までも含められる。われわれは、その基本的構成そのものは現代的意義を失っていないのに驚かされる。残念ながら、この方面におけるフランス地理学派のその後の研究は順調な発展をみせたとは決していえない。むしろ、谷岡が指摘したように (注22の (i), 509-517), 後退現象すらみられたのである。

3 心理的要素を介在させる社会地理学——ブリューヌ——

常に、正統と異端の関頭に立たされてきたブリューヌ²⁶⁾はヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの地的統一の理念に基づいて、ラッツェリアンの環境決定論を退け一彼はラッツェルの学問的功績については正当な評価を与えていた (注21, 58-66) 一師の可能論的見地²⁷⁾をより強く表に出した。一方、他の社会科学との競合を地理学のレゾン・デートルへの問いかけと受けとめたブリューヌは、二元論的に人文地理学を体系化し、三つの基礎的諸事象 (非生産的, 創造的, 破壊的という三つの土地占拠形態) の研究にその基礎をおいた²⁸⁾—ブリューヌの体系論と心理的要素の介在論の詳細は次章²⁹⁾で

論じるので、ここでは社会地理学との関連で若干触れておきたい。

社会地理学と地域経済 ブリュヌの体系論では、社会地理学は、三つの基礎的諸事象の連鎖の基礎的研究と「歴史の地理」の分野³⁰⁾に入る諸研究(①国民性・人種・言語・宗教, ②知的・技術的秩序の表明, ③集团的態度・共同体の心性・法律的社会組織)よりなる。そして、社会地理学のレゾン・デートルは、一定の自然環境と社会環境の影響下にある人類集団が多数の力によって意志的にこの地上を人文化(humaniser)している点に求められている。

集団生活の原初的な結果として、土地・労働・生産の分配と調整(仕事とその結果ともいえよう)といった経済機構とそれに随伴する諸機構がその社会の目標に沿って組織される。この組織の地理的解明には、景観的に把握しうる三つの基礎的諸事象そのものとそれらの連鎖の総合的研究が先行されねばならないとされる。社会地理学の観点からは、後者の研究がより重視される。それは「生活様式」の研究、より厳密には「地域経済」(économie régionale)の研究である(注29, 9-10)。ここでいう「地域経済」が前述の三つの基礎的諸事象の地域的な組織を指していることはいうまでもないだろう。ここで、彼の地域概念が問題となる。

ブリュヌは自然地域(région naturelle)の地理的有意性を認めたくえて、歴史的地域(région historique)をより重視する。人文地域(région humaine)が自然地域と整合しない場合がある。それは政治的統一や経済活動が歴史的に自然地域の枠を破って統一的地域を形成してきたからである。なかでも、経済活動の融合・統一作用が重要な働きをしてきたとみなされる。なぜならば、それは生活の基底をなすからである。ブリュヌはル・プレーの「地域的社会型」(type social localisé)は地理学的には「社会的地域型」(type localisé social)とみなされるとして、ル・プレーの業績を高く評価した(注28, 783-785)。ブリュヌ自身も、水利組織(注28, 789-795)、政治・宗教的領域³¹⁾、家屋(注28, 145-157)、生活様式(バレアル諸島・アンニヴィエール・ソアフなど)の各地域型の研究をとおして社会の地域タイプを論じている。そこでは、自然地域のうえに「地域経済」の基本鑄型がはめこまれ、そのうえに政治的・社会的・文化的な諸要素が作用して人文地域が融合統一されてくるという解析プロセスがふまれている。

ブリュヌの考えは明解である。自然地域を基盤に展開される基礎的諸事象の領域が人文地域の基礎をつくりあげ、そのうえに「歴史の地理」の分野に入る諸要素の作用領域(「経済地域」も含めて機能的地域とみても差し支えないだろう)が塗り込められて行く。これらが段階を踏んで研究される。地域を機能的に分析して行こうとす

るこうした姿勢はいちおう評価されるであろう。しかし、それが地域の構造的な理解へと発展しえないのは彼の限界か、それとも時代の限界であろうか。なお、生活様式の地域と「地域経済」のそれとの関連については明確にされていない。

心理的要素の介在 一見したところバラバラにみえる家屋と道路、動植物の征服、経済的掠奪と破壊といった基礎的諸事象にも、相互に関連づける人類集団の伝統と要求、換言すれば「集団の精神」とも呼ぶべき糸が張りめぐらされていることが看取される。こうした物的な形をとらない対象に地理学はどのようにアプローチするのか。それについて、ブリュヌは、人類集団がおかれた自然環境の影響と彼等の社会特性が一点に集結してあらわれる心理作用を介することによって、地理学は人間と自然的要因の両方に関連して諸事実を配分し秩序だてることが可能になると考える（注28, 890-891）。

人類集団の基本的欲求（衣・食・住）は、自然環境の影響と拘束のもとで社会的環境に規定されて（「自由選択の限界」, 「選択の可能性」）、その充足方向が選択される。そこに一定の心理作用が生じる。それが「一次的心理要素」であり、基礎的諸事象を整理する鍵となる。この基礎的諸事象に付随して発生する二次的諸ニーズの実現過程にあらわれる心理的作用（それは基礎的諸事象にも規定されている）が「二次的心理要素」であり、それは「歴史の地理」を基礎的諸事象と関連づける。以上の過程における諸事象は、ひるがえって基本的欲求への社会環境として作用することになる。

さて、基礎的諸事象とそれに関連する諸事象が心理的要素によってよく整理されるとみなすわけだが、①一連の過程における諸ニーズの選択過程を端折って、②歴史の地理の諸事象についても「その出発点と一般的方向について地理学は関心をもつが、その最後の結果にまではかかわらない」（注28, 794頁）と限定し、③さらに、基本的欲求の充足過程における社会的環境の作用の分析があいまいにされていて、はたしてそれが可能であろうか。彼のこうした基礎的諸事象への拘泥と心理的要素の社会性と歴史性に関する追求の甘さは、彼の社会地理学的研究の展開を著しく阻害している。それは、「一般的心理要素」の非客観性・非社会性・非歴史性、社会と諸個人の関係の不十分な展開、変革のサイクル的理解ないし無原則的变化に与したような見解などにはっきりと出てくる（注29, 14-22）。

一つのモノグラフ ジラルダン（P. Girarden）との協力よりなる「アンニヴィエール谷の居住集団」³²⁾と題するすぐれた集落地理学的研究の分析を通して、彼の社会地理学観のまとめと評価をしておきたい。この論文は彼の最も充実した時代のもので、彼の地理学観をよく反映している。変化に富んだ地形と他のアルプス地域に比べ

暖かい気候に恵まれたスイスのアンニヴィエールの谷々では、長期間にわたる移牧が行われる。その孤立性は閉鎖的で伝統主義的な社会心理を育てる。その結果としての人口圧は、他への転出という方法ではなく、ブドウ栽培を導入することによって域内で解決される。生産様式としては、移牧型、移牧+農耕型、農耕型、町のブルジョアジーといった類型が抽出される。こうした類型に対応してシャレー (chalet)、村 (village)、町 (bourg) といった多彩な集落組織が営まれる。さらに、生産様式と集落組織との関連に関する機能的分析がなされ、諸集団の形成が論じられる。町とその周辺、横谷、歴史地域としての小教区、行政地域としてのコミューン、共同体的地域としての村などの地域分析と、それに対応する自治集団から利害集団に至る諸集団の分析も行われる。このように、生産様式、集落機構、集団と地域、社会性などが、その諸連関を損うことなく、一通り論究されている。

この論文をこれまでの彼の理論と照合してみると、自然と心性（一次的心理作用）→生産様式→集落機構と諸集団→社会特性というプロセスを踏むその論法はまさに彼の理論の実践であることがまず了解される。各要素の機能的分析と各要素間の関係の把握もよくなされていることは評価に値する。しかし、生産様式の選択が自然環境とその心理への反映からのみ説明されていて、選択への社会的環境の作用にまったく触れられていないのはまさに彼の理論の欠陥を自から暴露してしまっていることになろうし、歴史的把握が不十分なため全体の構造と機能に、十分な脈絡が与えられていないことも同じことを示す。

とはいえ、地域と集団の機能的分析、経済機構と集落のそれとの関連性の分析、自治組織・利益配分制度・伝統と風習などの社会的側面をとりあげた点は、社会地理学を具体化させようとした彼の努力と考え合わせれば、ブリューヌが社会地理学の初期提唱者の一人に数えられるに十分な資格を有することを証すものといえよう。

4 社会形態学への反発と古典的地理学観の定着——フェーブル——

ラッツェルの社会研究における自然環境の重視と政治地理学の優位性の主張は社会学者の側より鋭い批判と自己主張をうけた。その先頭に立ったのはいうまでもなくデュルケーム³³⁾であった。ソール (M. Sorre) もいうように、その論争を蒸し返すことは無意味であり (注43, 序)、筆者もそのつもりは毛頭ない。ただ、この間の論争がフランス地理学の進むべき方向、とくに社会の地理学的研究のあり方に大きな影響

を及ぼした点は見逃せない。その観点より、この問題に若干触れておきたい。

デュルケームの抗議は、土地が社会生活全般を説明しようと考えるのは空想的であり、社会の研究を地理学が一人排他的に独占しようとする試みは黙過できないという点にあった（注13の上巻, 177-182）。彼によれば、「社会の基体」は社会集団の存在様式そのものに由来し、その物的形体とそれが形成される様式（位置・大きさ・人口数・分布・土地利用など）の研究、すなわち、社会形態学こそが社会の構造（作用様式の固化したもの）をよく解き明かせるのであって、そこでは自然そのものが説明しうる事柄はごく限られている。なぜなら、それらは社会そのもののあらわれだからである。したがって、それらの研究は社会学の名のもとに法則定立的な社会科学としてひとまとめにされるべきである。よろしく、地理学は社会形態学の補助学として在るべきである。これがデュルケームの厳しい主張であった。彼が「社会の基体」としてとりあげた諸物的形態は、これまで人文地理学が自己の安全な領域だと安穩に考えてきた対象の大部分を占めた。

これに対し、人文地理学の側からの反論役として、歴史家フェーブル（L. Febvre, 1878～1956年）があらわれた。彼はヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの地理学理念に則って、まず、ラッツェル一人が地理学者であるわけではないし、人文地理学は人類の主体性をはっきり認めているのだから、地理学が自然環境決定論を主張しているとするデュルケームの批判は当たらないとする。しかるのち、社会形態学派が物的形態をデータとして「社会の基体」と社会の構造・機能の研究をするとしながら、領土的基盤をもたない集団をもとり入れるという論理的矛盾をついている。しかし、この反論はやや強引であり、説得性に欠ける。なぜなら、一定の連続した領域をもたない集団についても、社会形態学的研究が不可能だとはいいきれないからである。とまれ、フェーブルは、地理学が地的統一の原理に則って社会集団の環境への働きかけとその作品に注目して、人間の科学としてでなく場所の科学として自立的に社会の研究に参画しようと主張した。そして、人類の社会性・歴史性そのものの研究は社会学と歴史学に委ね、控え目な人文地理学の立場を強調した（注13の上巻, 123～132）。こうした、ある面では対社会形態学から出てきたともいえるフェーブル流の社会観はその後のフランス地理学界に定着した。それは、①社会を土地との関係、あるいは地理的事象と関係する範囲内で取り扱う、②地理学と社会学の間に一線を設ける、③地理学は場所の科学であり、人間の科学でない、といった立場である。こうしたヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ的理念の論理的補強やその普及におけるフェーブルの役割は、部分的にはやりすぎたとしても、高く評価されるだろう。

その反面で、フェーブル流の謹しみ深い社会観は、人類の主体性を云云しながら、結局人類の社会性の地理的研究を狭い場所性に閉じこめ、地理学的立場からする社会の合理的、体系的認識のフレーム・ワーク構築のチャンスを奪いはしなかったか。そうした思惑が社会学のみならず他の社会諸科学と地理学の積極的な交流を阻害しなかったかといった疑問が投げかけられる。ともあれ、社会学と地理学の和解と協力、社会の研究への積極的取り組みはソールらの粘り強い努力とディッキンソン(R. Dickinson)のいう第三～四世代の活躍を待たねばならない(注12)。

5 集落地理学的研究——ドゥマンジュオン——

不覇の気概の強かったブリューヌと異なり、廉直の人ドゥマンジュオン(A. Demangeon, 1872～1940年)はクールなボン・サンスでもって、師ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの諸理念に豊かな肉づけをした³⁴⁾。われわれは、彼のうちにフランスの伝統的地理学の真髄をうかがい知ることができる。

人文地理学の定義と対象 ドゥマンジュオンの地理学観は未完の書“*Traité de géographie humaine*”の序言になるはずだった「人文地理学の定義」³⁵⁾に簡明に表明されている。「人文地理学は人類集団を地理的環境との関連において研究する」と定義し、人類の個体的、生理的、心理的³⁶⁾側面はそれぞれ人類学、生理学、心理学に委任され、社会性の心的側面も社会学に委ねるとされた。地理学は大地上にあらわされている人類の生活とその作品の研究に専念する。人文地理学に個有な対象としては、①自然が提供し、かつ人類社会が征服している諸資源の利用(狭義の生活様式)、②文明のパターンの変革、③人類集団の分布状況(密度、実数、移動)、④人類の居住(établissement ≡ 集落)の諸様式という4類型があげられる。この定義と対象の規定に対する評価は後ほど行うとして、つぎの2点を補足しておきたい。その一つは、ドゥマンジュオンの歴史的炯眼が変化・変革といった動態的分析を可能にしていたことであり(必ずしも理論的にとらえていたとはいえないにしても)、二つ目としては、そうした諸事象の動きを実証的に分析する手法が、ともすれば彼の手からこぼれ落ちようとする地理的事象の構造的・機能的分析を彼に取り戻させている点があげられる。

集落研究の意義とその限界 人類は本来的に集まり住む(peupler³⁷⁾、人類や動植物が集団的に一定の場所を占拠すること)。このことは、地理学的な意味における最も基本的な集団が、一定領域を占め、その基盤のうえに生活を成り立たせているよ

うな集団であることを示唆する。ドゥマンジュオンによれば、この集住の結果としての集落の研究³⁸⁾は固有な文化と歴史的過程をもつ居住集団の特性に由来する生活様式の科学の最も基本的な一面をなす(注35, 159-160)。それは人類の居住史を、過去と現在の社会の種々相(物質的・非物質的の両面……後者が従的に扱われる)を、そして社会の基盤を解き明かす鍵を提供してくれる。ドゥマンジュオンにあっては、集落は①社会集団の地理学的メルクマールであり、②そこに社会生活が具象化されていて、③土地と人類の交渉、そしてその結果があらわされているとともに、④生活様式の基本的容器であるとみなされている。

人類の社会性の研究方法として、彼の集落概念には次の二つの欠点が含まれているようである。すなわち、彼の集落概念(家屋 maison, 村落 village, 国家 état)に入りきらないか、またはうまくとり入れられないような社会集団や社会的諸事象は、ともすれば彼の視野から外れてしまう。しかも、小地域に重点が置かれ、そこから大地域へと研究が進められないために、彼の集落地理学は狭義な集落の研究にしぼられた感が深く、都市の研究も不十分なものになっている(晩年には経済地理や都市地理に関心を示したが、成就するに至らなかったのは惜しまれる)。もう一点は、集落の形態・分布・内部構造が主としてとりあげられ、集落間や地域間の構造的解明が疎かにされた感が否めないことである³⁹⁾。集落研究では、わずかに小村(hameau)と村落(village)、村落とブル(bourg)やカルティエ(quartier)の間における、サービスや行政関係を通じた結節的關係に論及されている程度である。経済地理的研究(注35, 53-130)や都市の研究⁴⁰⁾においても、社会の地域構造論的分析や地域間の結節的構造などの機能的解明は不十分に終わっている。

以上のように、ドゥマンジュオンは土地を基盤とする社会集団の研究という地理学的命題を立てながら、その成果は限られたものに終わった。その一因として、彼が社会学をはじめ他の関連諸科学との相異点にこだわり、自らを規制した点があげられるのではないだろうか。己と他とのちがいを知ることは決して無駄なことではない。しかし、相異なる点が自己の本然の全てではない。これはいわずもがなのことであるが。

集落研究の実際 分散か集中かというヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ的観点に導かれて、ドゥマンジュオンは集落の多様性を、自然条件と農地組織、農業構造、社会の集団様式といった社会経済構造の歴史的階梯とに関連させて、それぞれの発展モデルを提示した(注35, 159-205)。そこでは、家族単位の社会→古代の一次的分散、自立農民の形成→耕地への接近→二次的分散、経済合理性の追求→近代の一次的分散、中世における開墾・三圃作・安全の確保→集居といったように、社会特性と集落形態

の関連性を論じ、さらに集居型における社会的接近と理念・感情の共有、散居型における独立の精神と個人主義的傾向といった集団の心理にまで説き及んでいる。

「エジプトにおける農村生活の新局面とその問題点」(注35, 341-368)の章では、政治改革に伴う農業経済の変革が生活様式に与えた影響と富の新しい形態が社会的諸事象にどのように反響したかが問題とされ、物質的要素に限らず、高い人口密度、共同体的集団構成、伝統と古いモラル、慣習的生活態度、低い生活水準といった非物質的諸事象が旧式な生活様式を支えている様子と、変革がもたらしつつあった新たな傾向を幅広く論じている。そこに彼の鋭い社会観察の目をわれわれは見取ることができる。惜しむらくは、そうした詳細な記述にかかわらず、社会が地理的に体系化されたものとしてはわれわれの目に映らないことである。それは、いうならば土地への影響を前提としたトピックス的な議論という印象を免れえないものであったからであろう。一口でいえば、それは構造的に把握されていないからであるといえよう(この研究が現状報告的なものであるという事情は考慮されねばならないが)。

「農村と農村共同体」⁴¹⁾では、農村共同体の研究は農民や農家の集合と分布の状況とそれら住民を養っている地域を扱うこと、それらの相互関係が重視されること、それらの地理的事象が社会的事象にどのような影響を与えているかが問われなければならないことなどがまず指摘される。次いで、農村の歴史的発展の3段階をとり出し、家族制、村落共同体、共同体的規制、自立的農民の形成、異なった範囲をもつさまざまな社会集団の発達といった社会的諸事象が土地所有制度・農地耕造・農耕様式といった土地的・景観的要素との相互関連において論じられる。そして、モラル的な要素は一定の農業経済様式の存在を必須条件とするとして、上部構造的なものとして認識されている。

ドゥマンジュオンの一連の集落地理学的研究⁴²⁾は土地という基盤の上に築かれたことをみてきた。彼の研究により、集落の地理学的解明(ことに歴史的側面と土地・社会・集落形態の関連性の究明において)は大幅に進んだ。また、集落の社会的側面や非景観現象に立ち入って集落社会の解明にあたったことも認められる。しかし、既に述べたように社会の研究を限定し、それを体系的にとらえる地理学的研究のフレーム・ワークを用意しなかったために、彼の社会研究は幅の狭いものになってしまった(注39, 182-183)。ドゥマンジュオンの集落概念には、宗教集団や広域な団体や組合組織や階層集団などがうまく抱摂されていないし、政治集団や都市も入ってこない。集落内部の社会構造も、土地・農業・集落形態との関連においてしかとらえられず、部分的分析に終わっている。さらに、経済以外の政治的・社会的・文化的諸要素の土地・

集落への作用構造も統一的に把握されていないし、集落間の階層性を帯びた関係や結合組織といった広い地域構造の解明はまったく圏外に置かれてしまっている。

6 古典派から新世代へ

「ヴィダル流の伝統の蓄積を直接受け継いだ世代」⁴³⁾であると、ソール (M. Sorre, 1880~1961) みずから誇らかに言明するように、彼の地理学の根幹はフランス地理学派の伝統に根ざしている。それは地理的現象の地的統一性・相関性・複合性、生活様式概念、景観の重視、地誌の尊重、記述説明などに要約されよう。松田⁴⁴⁾ もいうように、第二次世界大戦前後より古典的地理学が社会の構造論的、機能論的、そしてダイナミックな理解へと脱皮して行く過程において、指導的役割を果たした人々の中でも最も注目すべき1人としてソールを数えることができよう。

彼の遺著、『大地上の人類』⁴⁵⁾の序論において人類集団の地理的特性として、①可塑性、②高い精神作用、③運動性、④社会性をあげている。こうした人類の能力は、人類が環境に適応するとともに、みずからの創意と努力により己のために大地を組織して行く力を有していることを示している。人類の主体性・能動性が地理的事象に占める比重は技術の進歩と社会の高度化に比例して高まる。今世紀における西洋社会の発達はめざましいものがあり、それをつぶさに観察してきたソールがそうした変化に地理学をどのように適応させて行くべきか、その方途に深い関心を払ったのは当然といえよう⁴⁶⁾。人類の四つの局面に近づく地理学者は物象と景観の枠を取り払って、それらを貫き、結びあわせている社会・経済・文化・政治の仕組みやそれらに潜んでいる精神にまで立ち入らねばならない。経済・政治・文化というも、それらには広義の社会概念に帰着されうる面が少なくない。その意味からして、人類の社会性の地理学的解明が人類の地理的主体性・能動性の研究の中心をなすといえる。以上が、伝統より抜きん出たソールの面目である。

地理学と社会学の接点 フランス地理学派と社会形態学派との論争については既にフェーブルの項で述べた。ソールは無益な論争より両者の協調に意を用いた。

社会学は、①集団とその物象(大きさ・位置・人口数・土地利用など)を「社会の基体」とみなし、②それらの構造と機能、そしてそこから湧き出てくるもの(「社会の基体」の作用形式)を出発点として、社会のより内面的な理解と理論化へと進む、③その対象空間には主観的要素が入ってくる、といった点をその特色とする。地理学

の独自性としては次の3点があげられている。①社会が地的基盤のうえに成り立つという基本的認識より、「社会の基体」を大地との関連において究明する。②全体との関連性に絶えず注目しつつ、景観・物象を手懸りに分布・位置といった地理学的方法を用いて、社会と環境との関係を中心に社会構造の物的側面や社会生活の技術などを記述・説明し、そこにとどまる。③地理学者の空間は客観的空間である。両者は経済の分野で交わり、「社会の基体」の研究で協力しあえる。地理学の現実性と社会学の抽象性は相互補完的であるといえる。これが、ソールのいう両者の独自性と協力の要点である（注43, 27-38, 67-91）。

社会と技術 ソールは、最も広義な意味での技術⁴⁷⁾ (technique) に人類の創意が表象または結実されているとみる。生きるすべとしての技術は社会的につくられ、組織され、発展し、変えられて行く。この技術は、生産技術、エネルギーの技術、社会生活の技術、空間克服の技術よりなり、それらは個別的にではなく多角的に検討される必要がある（注47の(i)のII・III）。これら諸技術は景観や物象という地理学に馴染み深い対象をこしらえあげている。したがって、地理学者は景観の分析に手引きされて技術の領域へ、さらに技術をうみだし発展させて行く人類集団の創意と精神という非物象の世界へと分け入ることが可能となる。以上が、ソールの技術観である。社会生活の技術はあらゆる社会集団と社会的諸事実を貫いており、他の諸技術の母体であるとともに、それらによって形づくられてもいる。この分野では、①地的基盤のうえに展開される諸社会集団、②社会的諸事実、③環境総体と①・②との関係、④それらの空間的諸事実などがとり扱われている。まず社会集団であるが、それは「基礎的集団」(家族・村落といった自然的集団や宗教集団・言語集団など)、政治的集団(地方政府・国家・政治的大ブロック)、都市⁴⁸⁾といったカテゴリーに分類される。なかでも、政治的國家の存在の諸条件に最大の関心が払われる（注47の(i)のII, 15頁）。村落と言語集団という異質な集団が「基礎的集団」として同一カテゴリーに分類されるのは、まさしくそれらが政治的集団、ことに國家の形成基盤をなすという点においてである。だが、両者ははたして同一レベルでよく論じることができるだろうか。同じく、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュが第一義的にとらえた文明集団はどこに位置づけられるのだろうか。いわゆる社会学的集団や経済的集団はどうか。これらの疑問点にソールは直接答えていない。「社会生活の技術」に入る集団をいわゆる政治地理学的集団とそれに関連する諸集団に限ってしまって、はたして社会生活をよく整序するだろうか。

次に、宗教・農村・都市の研究において、社会的諸事象をどのようにとらえたかを

瞥見しておこう。「宗教的事実は人間の活動の基本的様式そのものを方向づけ、限定する」ゆえに（注47の（i）のⅡ，31頁），地理学的対象となる。逆に，社会構造から文化・居住様式・職業までを含めた生活様式の諸特性が人類の宗教的態度に反響していることも事実である。ソールはこの両面を文化複合体の一部として，地的基盤の上において，その立地・分布を研究するが，ことに政治的諸事実との関連性（市民社会や国家の形成との関係など）を重視する。農村の研究では（注47の（i）のⅢ，38-183），集落形態と集団の精神や心理（安全性への要求，共同体性と自立性など），耕作様式と労働組織，家屋形態・農業様式と家族制度，土地所有と社会階層，政治改革と居住様式の変化というように，ソールは社会的諸事象を土地的要素や景観と関連づけて分析を進め，他の諸技術との関係構造や集団が個人に及ぼす影響（共同体的規制）にまで説き及んでいる。都市の研究では（注47の（i）のⅢ，154-436），都市住民の社会空間，諸々の関係の生活，都市の精神などが主として景観面から分析されている。総体的に，集団の空間的展開，集団相互の関係，社会的諸事実の地理的反響，集団心理の個人への規定的作用面などの景観的・空間的分析を中心に，社会学や人類学の成果を積極的にとり入れている。しかし，前記の諸事実を社会の総体的構造に位置づけたり，社会の内部構造や社会的諸事象の機能的分析をするまでには至らない。また，個の集団への反響や非物的諸事象の物的諸事象への作用面についての考察も不十分である。とはいえ，ソールによって社会の地理的研究が飛躍的に進んだことも争えない事実であり，その面は高く評価されねばなるまい。

③の環境との関係，④の空間的諸事実については，これまでの論述からもわかるように，やはりソールもそこに地理学の本質をおいている。空間的諸事実ということに関連して，彼の地域論に少し触れておこう。ソールは人類集団の活動を第一義的にとらえ，その統一的な表出である生活様式にポイントをおいて，次のような人文地域の3類型を提示した（注47の（i）のⅢ，445-450）。すなわち，①同一の生活様式を営む細胞的な「基礎地域」（pays など），②同一タイプの生活様式により特色づけられるが，相補い合い，ヒエラルキーをもった結合を示す第二級地域（パリ盆地など），③文明と呼ばれる地域である。この提示から，彼のいう人文地域が総合的・統一的な地域であることがわかる。ただ，人文地域と前述した諸社会空間とがどのように関係づけられるかがはっきりしない。後者は機能的地域とも呼ぶべきものなのかどうか。彼の地域論の中でその点が体系的に位置づけられていない。こうした欠点はソールだけでなく，フランス地理学，ことに古典期の人々に共通した傾向である。地理学の一体性を強調し，地誌を尊重するフランスの地理学者は，社会地理・経済地理・文化地

理などが当然あつかう対象としての集団とその領域や地域を体系化することに不得手であったようである。

生活様式論の更新 ソールによれば⁴⁹⁾、分業と技術の進歩は古典的生活様式に変化をもたらし、交通の発達と活発な人口移動は文化の伝播と移動あるいは新しい環境への適応を促し、それらが新しい生活様式をもたらすという。そして、諸技術を異常に累積した都市という生活複合体が発達してくる。この都市的生活は自然の影響からは相対的に独立し、複雑な社会的・経済的組織を構成し、相互依存性の高い生活様式を形成する。都市がもたらす異化作用と破壊作用は農村社会のこれまでの閉鎖的で自立的な社会経済機構を都市に大きく依存する開放的な機構へと変えて行く。一部には、不完全生活様式とも呼ぶべき依存性の高い農村部の発生をみるに至る。今や、ソールは都市と農村を別個な存在としてでなく、相互に深く結び合わされた存在として確認するに至る。単一生活様式だけでなく複合的生活様式が、そして空間的には等質地域より都市を中心とする結節地域が問題とされる。ソールはこれらの問題を技術という観点から景観的・空間的に分析する。こうして、ソールは古典的生活様式概念に変革の概念を与え、そして複合型・不完全型・都市型・大都市圏型といった新しいカテゴリーを盛り込むことによってその更新をはかり、一応の成果をあげた。しかし、ゴットマン (J. Gottman) やジョルジュ (P. George) の批判点 (注24) を完全に克服したとはいえない。例えば、変革を遷移 (succession)、サイクル (cycle) といった生態学的概念を用いて説明しているが、それは変化の外面をとらえることに終り、その内的構造や背景にまでは及んでいない。ソールみずからもいうように (注43, 130頁)、人類生態学的方法についてはまだまだ吟味されねばならない事柄が多い。

最後に、ソールの社会地理学観にふれておこう。ソールは社会学者と交わり、人類の社会性を追求する過程において、環境の力強い影響と人類の主体的活動の間を、また時には場所の科学としての地理学という考えと人間の科学としてのそれとの間を探索しながら、結局、社会学との間に節度を求め、社会地理学を次のように規定した。「異なる社会構造をもつ各タイプに応じ……総合的な社会地理がある。歴史的産物、理念、道徳的・経済的諸力が今日の世界において覇を争っている。社会地理学は人文地理の最も複合的かつニュアンスにとんだ一章をなす……」(注47の (i) のII, 163頁) として、ジョルジュ的な科学的社會地誌の記述を支持した。このよしあしは別として、これはフランス地理学派の必然的な一つの発展方向といえよう。

むすび

フランス地理学派の研究は、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュが与えた生活様式、地的統一に基づく総合的認識、地誌の尊重、人類の創意性と主体性、場所の科学といった諸基本理念に則って展開された。

それぞれ異なったかたちではあったが、4人の地理学者はいずれも生活様式について語った（フェーブルもそうだが）。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは人類の生活の統一的理解の手だてとして生活様式という地理学概念を構築したが、それが自然地域に基盤を置く古い農村的生活を主たる対象にし、しかもその理論が概括的で不明確な点が多かったために、後続の人々は各人各様な展開努力を強いられるはめになった。ブリューヌは「基礎的諸事象」の連鎖または「地域経済」に対象を絞ろうとしたが、「歴史の地理」の分野とうまく整合させえなかった。ドゥマンジュオンは集落の研究においてその基本構造を把握したが、社会の体系的理解にまでは至らなかった。こうした傾向に対し、生活様式概念が現代社会にマッチしない旧式な概念であるとする批判が出てきた。それをうけて、ソールは技術総体という考え方と人類生態学的方法を用いてより分析的なアプローチを行い、変革の理念をとり入れて生活様式論を都市までも含む概念とした。それは生活様式論の再生への努力であったが、技術総体・生活様式・集団という三つの概念の関連性や社会的諸事象の機能的構造的な分析についてはまだまだ不十分なものであった。

地的統一に基づく総合的認識論は地理学の一体性を強調し、特殊地理学の分立を排した。それは、バランスのとれた全体的認識を促した反面、わるくすれば曖昧さや恣意的解釈を許し、因果関係の分析を不十分なものにしたことも否めない。ひいては、それは社会の構造・機能の分析や体系的認識を弱める結果をもたらした。ジョルジュの行き方はそうした反省のうえにたったものといえよう。

地誌の伝統は、その実証性と帰納性のゆえに、フランス地理学のバランスのとれた発展の尽きせぬ源泉となったことは確かである。地誌学的方法は、方法論が未整備なためにとらえにくかった人類の社会的側面をしっかりと掬い上げることによって、社会の地理学的研究を下支えしたといえよう。フランス地理学派は、社会形態学派との競合もあって、「場所の科学」という立場に立ち、地的基盤において社会をとらえるとか、地理的事象と関連する範囲で社会的事象を取り扱おうとかいって自己規制した。それは地理学の独自性を守りはしたが、その反面においては地理の領域を狭め、方法

の固定化を招きはしなかったか。人類の創意性、地理的主体性という認識の高まりは否応なく地理学を諸社会科学に近づけた。ソールの業績もその方向に沿うものであった。

最後に、今後の課題を列挙すれば、①生活様式概念の理論的再検討、②変革の構造的解明と都市・都市農村関係といった結節的社会の分析方法の確立、③集団と地域、集団と個人、物象と非物象の関係把握のための基礎的フレーム・ワークの構築、④技術、人類生態学的方法、ニーズ理論といった方法論の吟味（実践と理論の両面にわたって）、などがあげられる。

注

この注欄には初出のもののみ示す。2度目からは、本文中の括弧内に注番号ならびに該当頁を示した。なお、注の中でA.G.とあるのは、フランスの代表的地理学会誌の*Annale de géographie*を指す。

- 1) ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ以前にも同様な主張を見受けるが、地理学に人類の主体性を回復し、その社会性を正当に位置づける動きが彼に発するという意味においてである。
- 2) この点については、大阪市立大学の藪内芳教授（故人）をはじめ学兄諸氏より多くの教示をいただいたことを記し、感謝したい。なお、①～⑤の分類は厳格なものではない。ソールのように一つの枠に収まりきれない人物も多い。社会地理学史については、(i)Craval, P. (1969) *Essai sur l'évolution de la géographie humaine*. Les Belle Lettres, Paris. 参照。
- 3) M. Le Lannou, J. M. Houston, M. Sorre など。
- 4) H. Bobek, A. Meynier, P. W. Brayen, 綿貫勇彦など。
- 5) J. Brunhes, M. Sorre, J. W. Watson, 樽松静江など。
- 6) K. A. Wittfogel, P. George, 内田寛一, 小原敬士など。
- 7) C. C. Huntington, T. W. Freeman など。
- 8) Le Play, F. (1855) *Les ouvriers européens*, Imprimerie impériale, Paris.
- 9) La science sociale シリーズは1855～1879年に計12冊発行された。
- 10) Le Play, F. (1871) *L'organisation de travail*, Alfred Mame & Fils, Tours, pp.22-28.
- 11) Le Play, F. (1879) *La méthode sociale*, Dentu, Paris, pp.81-131.
- 12) Dickinson, R. (1969) *The markers of modern geography*, Routledge & K. Paul, London, pp.197-207.
- 13) フェーブル〈飯塚浩二訳〉(1971, 改訳版)『大地と人類の進化』(上), 岩波書店, 109-116参照。下巻は田辺裕訳で1972年発行された。
- 14) Watson, J. W. (1951) The social aspects of geography, in G. Taylor (ed.) *Geography in the 20th century*, Methuen, London, pp.463-499.
- 15) Meynier, A. (1945) La commune rurale française, A.G., N°295, pp.161-179.
- 16) Craval, P. et J. P. Nardy (1968) *Pour le cinquantenaire de la mort de Paul Vidal de la Blache*, Les Belle Lettres, Paris, pp.35-90.
- 17) ブラーシュ〈飯塚浩二訳〉(1940)『人文地理学原理』(上, 下), 岩波書店, 51頁, 61-85。
- 18) デュルケーム〈田原音和訳〉(1971)『社会分業論』, 青木書店, 253頁。

- 19) J. P. Nardy, J. Gottmann, P. George, E. Juillard 等があげられる。
- 20) ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの諸論稿として、注17のほか、(i) Le principe de la géographie générale, *A.G.*, Ve année, 1896, pp.129-142. (ii) La géographie politique, *A.G.*, N°32, 1898, pp.97-111. (iii) Les conditions géographiques de faits sociaux, *A.G.*, 1902, pp.13-23. (iv) Les genres de vie dans la géographie humaine (I. II), *A.G.*, N°111, 1911, pp.193-213. *A.G.*, N°112, 1911, pp.289-304. (v) Des caractères distinctifs de la géographie humaine, *A.G.*, N°124, 1913, pp.289-299.
- 21) Brunhes, J. (1925) Human geography, in L. W. Ward (ed.) *The history and prospects of the social science*, Alfred A. Knopf, New York, pp.55-105.
- 22) ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの生活様式論は注17の上巻第2編の注20の(IV)・(V)に詳しい。その他に、(i) 谷岡武雄 (1955) フランス学派における生活様式概念, *立命館文学*, 122, 509-517. (ii) 松田 信 (1961) 生活様式論再考, *人文地理*, 13-6, 29-48. (iii) 松田 信 (1965) 景観と生活様式, *人文地理*, 17-2, 1-21.
- 23) Ribero, O. (1968) En relisant Vidal de la Blache, *A.G.*, N°424, pp.650-651.
- 24) (i) Gottmann, J. (1947) De la méthode d'analyse en géographie humaine, *A.G.*, N°301, pp.1-12. (ii) George, P. (1951) Introduction à l'étude géographique de la population de monde, Institut national des études démographiques, cahier N°14, Paris, p.284.
- 25) Juillard, E. et P. Claval (1967) *Région et régionalisation*, Dalloz, Paris, pp.11-13.
- 26) De Martonne, E. (1931) Nécrologie, *A.G.*, N°152, pp.549-553.
- 27) Tatham, G. (1951) Environmentalism and possibilism, in G. Taylor (ed.) *Geography in the 20th century*, Methuen, London, pp.128-162.
- 28) Brunhes, J. (1910) *La géographie humaine*, Felix Alcan, Paris, pp.921-927.
- 29) 19-26頁参照。
- 30) Brunhes, J. et C. Vallaux (1921) *Géographie de l'histoire: géographie de la paix et guerre sur terre et mer*, Felix Alcan, Paris.
- 31) Brunhes, J. (1913) De caractère propre et du caractère complexe des faits de géographie humaine, *A.G.*, N°121, pp.1-40.
- 32) Brunhes, J. et P. Girardin (1908) Les groupes d'habitation du Val d'Anniviers: comme types d'établissements humains, *A.G.*, N°82, pp.329-351.
- 33) 小寺廉吉 (1967) 社会学と地理学との境界領域における若干の問題, *桃山学院大学社会学論集*, 2-1, 1-15.
- 34) De Martonne, E. (1940) Nécrologie, *A.G.*, N°280, 161-169.
- 35) Demangeon, A. (1952) *Problèmes de géographie humaine*, Librairie Armand Colin, Paris, pp.1-10.
- 36) Demangeon, A. (1940) La géographie psychologique, *A.G.*, N°278-279, pp.134-137. この論文でドゥマンジュオンはG. Hardyの同名の本を批判している。
- 37) "Pourvoir un lieu en hommes en animax, en végétaux. Remplir un lieu d'habitants par la voie de la génération" (Le Quillet Flammarion)
- 38) Demangeon, A. (1926) Un questionnaire sur l'habitat rurale, *A.G.*, N°196, pp.289-292.
- 39) 松田 信 (1964) 地理学における構造と機能, *大阪学芸大学紀要*, 12, 182-183.
- 40) Demangeon, A. (1948) *La France: France économique et humaine* T. II, Librairie Armand Colin, Paris, pp.786-828. のパリ研究など。

- 41) Demangeon, A. (1933) Villages et communautés rurales, *A. G.*, N° 238, pp.336-349.
- 42) Demangeon, A. (1946) *La France: France économique et humaine* T. I, Librairie Armand Colin, Paris, p.40.
- 43) ソール〈松田 信訳〉(1968)『地理学と社会学の接点』, 大明堂, 2頁。
- 44) 松田 信(1965) 人類生態学, 大阪学芸大学紀要, 13, 158頁。なお, 本稿で古典的という場合は, 同氏の用法に従った。
- 45) Sorre, M. (1961) *L'homme sur la terre*, Librairie Armand Colin, Paris, pp.2-6.
- 46) 松田 信(1962) 地域の描写的記述から構造的記述へ, 三重大学学芸学部研究紀要, 25, 84-88, 98頁。
- 47) ソールの技術という概念については, 注43, 注45の他に (i) Sorre, M. (1951-1954) *Les fondements de la géographie humaine* T. I - III, Librairie Armand Colin, Parisがある。なお, 注45の序言でソールは技術という用語は「空間活動の全領域における人類の生産と技量の全てに適用される」と述べている。
- 48) 注47の T. IIIで, 村落と都市が集落として別に扱われ, 「政治的, 経済的構造と地理」という章が付け加えられている。
- 49) Sorre, M. (1948) La notion de genre de vie et sa valeur actuelle I, II, *A. G.*, N° 306, pp.97-108, N° 307, pp.193-204.

第2章 ブリュヌの人文地理学体系と方法

— 批判と展望 —

はじめに

1869年に南仏のツールーズ（Toulouse）に生まれたブリュヌ（Jean Brunhes, 1869～1930年）はパリに出て、当時の地理学志望者と同じく「高等師範学校」（École Normale Supérieure）でヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ（P. Vidal de la Blache, 1845～1918年）の指導のもとに地理学を学んだ。1896年にスイスの片田舎フリブール大学（Université de Fribourg）に自然地理学の教授として赴任した。同地では、アルプス地方を中心に氷河浸蝕などの自然地理学的研究¹⁾や高山遊牧地帯の優れたモノグラフをものした²⁾。

彼は自己の周囲にいる人間を上手に使って、その人間の能力を最大限に発揮させるのに長けていた。これらの研究においても、弟子たちの親密な協力を得て自己の研究の充実に努めた³⁾。己の殻に閉じこもる地味なタイプとは違って、彼は多彩な能力⁴⁾と魅力的な雄弁⁵⁾とによって優れた教育者あるいはオーガナイザーとして成功したし、後年にはその傾向がいつそう助長されて、他の学問分野の研究者たちとの交流も深め、その経歴を彩った。1908年にはローザンヌ大学（Université de Lausanne）に欧米では最初といわれる人文地理学の講座を開設した。

1910年に、フランスにおいては“人文地理学”と銘打つ最初の書物『人文地理学—実証的な分類試論、原理と実例—』⁶⁾を著わした。この膨大かつ野心的で自信に満ちた、しかも珍しい景観を配し、暗示的であるとともに個性的な大著⁷⁾は一般には成功し、1912年にコレージュ・ド・フランス（Collège de France）の人文地理学教授の椅子を彼に与えた。この著作はアメリカ⁸⁾・日本⁹⁾・イギリス¹⁰⁾などで翻訳され、彼に世界的名声をもたらした。まさに、彼は師ブラーシュを越えて、内外にわたってフランス地理学界を代表する観を呈した。国内では、著名な史家オナトー（G. Honataux）監修の『フランスの歴史』にジラルダン（P. Girardin）、ドゥフオンテーヌ（P. Deffontaines）と協力して『フランスの人文地理』2巻¹¹⁾の分担を、アメリカではウォード（L. F. Ward）監修の『社会科学の歴史と展望』の〈人文地理〉¹²⁾の担当を要

請された。この点ではフランスの地理学者たちに僭越の感を与えたようで、学界では彼のこうした活躍は業績的にも感情的にも必ずしも快く迎えられなかったようである¹³⁾。

よき協力者ヴァロー (C. Vallaux) とは、共著『歴史の地理—大地と海上における平和と戦争—』¹⁴⁾ を、また娘マリエル (Mariel, 後のMme Delamarre) の協力をえてポーマンの『新世界』¹⁵⁾ の翻訳を完成し、そして没後すぐに『人種』¹⁶⁾ が娘の手で上梓された。以上のごとく、彼は当時としては非常に多産な地理学者でもあった。

人は彼を評するに、南仏人特有の真摯・情熱・雄弁を、そしてそこから浸み出てくる大衆うけする魅惑的でセンセーショナルな文体と雄弁をあげ、時にそれが自信と野心につながり自己中心的であるといつて非難した (注13参照。以下、既注はその番号でもって記すことにする)。また他の人々はいふ。彼は優れた旅行者¹⁷⁾ であり、鋭い独創的な観察眼によって分析し、簡素化し、タイポロジーし、地誌的 (topographique) で、かつ精彩な表現力でもって読む者に力強い印象を与えたとも (注7参照)。こうした経歴を繙く作業はわれわれを研究者の心に近づけてくれるし、研究の背景についてなほどうかの手掛かりを与えてくれる。しかし、われわれはそれを一応脇において、業績そのものの厳正な分析のうえに立ってその学説を評価するべきであろう。

さて、わが国では戦前に既に松尾俊郎による抄訳『人文地理学』¹⁸⁾ があるにもかかわらず (フランスの本格的地理学書の最初の翻訳ではなかろうか)、ブリュヌについてはあまりよく知られておらず、管見にふれた限りでは本格的な評論としては飯塚浩二の「ブリュヌにおける心理的相対主義について」¹⁹⁾ と題した、ブリュヌにおける無時間的・非社会的な心理的相対主義を非難した論文をみるのみである。われわれはこの一言でもって彼を片付けてしまつてよいだろうか。学説史的には、彼の数々の著作が世界的に紹介され大きな影響を与えたことは否めない。今なお、フランスはもちろん諸外国の地理学書において、その意図はどうかであれ、基本的なレファレンスとして彼の著作があげられているのも事実である。たとえ、彼がフランス地理学界の主流から逸れた行き方をしたと一般に評されるとしても、彼の立場を解き明かすことは、逆説的にフランス地理学界がどのような方向において発展の途を拓いたかを知る一つの証言をうるであろう。そうした消極的な意味からだけでなく、筆者は自然と人類の間に心理的作用を介在させる彼のイデー (idée) に十分なコメントを付したうえで、そこからなんらかの展望を導き出すことにも努めたいと考える。

人類が社会的存在 (そして歴史的存在) であるとヴィダル・ド・ラ・ブラーシュが喝破したところから、現在の地理学はどれほど進んだといえようか。ただ、やみくも

に隣接諸科学の分野に無策・無遠慮に足をふみ入れるか、逆に己の「土地」, 「自然」という概念の殻の中に固く閉じこもり人類の地理的主体性を発掘しようとしがないでいるのが実情ではあるまいか。われわれは人類と自然のかかわりを並列的・相互的にみるリッター的思考から脱皮し、人類の地理的主体性を確立せねばなるまい²⁰⁾。その第一歩として、人類の地理的行為のプロセスについて、あるいはその社会性や歴史性についての基本的フレーム・ワークを構成しておく必要がある。そうした意味から、彼のいう十分に考慮された「心理的要素」(facteur psychologique)の分析によって何がもたらされるのか、そしてどのような問題点を孕んでいたのかを検討しておくことは決して無駄ではあるまい。さらに、社会的存在としての人類の立場を押し進めていけば、その局面にもっぱら迫ろうとする部門が地理学のうちに芽生えてくる。そうした萌芽期において、それが一般地理学につながる第一歩となりうるとした一発言者としての彼も忘れることはできないことを付け加えておきたい。この点については前章で社会地理学的観点から触れたところである。

1 ブリュエヌの地理学体系論

1.1 体系論とその背景

ブリュエヌの人文地理学体系の発想の基盤を理解するにはまず当時のフランスの地理学がおかれた状況を整理しておかねばならない²¹⁾。近代の科学的地理学の祖とみなされるラッツェル(F. Ratzel, 1844~1904年)は、リッター(K. Ritter)とフンボルト(A. von Humboldt)の近代精神に導かれて、自然と人類の関係を前者の后者への影響に主眼点をおいて体系的・科学的に地理事象を理解し、一般的法則を打ち立てる立場を人類地理学(Anthropogeographie)に結実させようとした。晩年には彼が政治地理学に関心を移し、その領域を拡大した点は批判されるとしても、彼にみられる科学的精神と地理学を理論化・体系化しようとした試みは近代地理学発達の原動力となった点で高く評価される。

歴史に造詣の深かったヴィダル・ド・ラ・ブラーシュにとって、ラッツェルにみられる機械論的決定論、自然の影響の偏重、ドグマティックな理論化にはとうてい首肯しえないところであった。そこで、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは「地的統一」(unité terrestre)の理念に歴史精神を吹き込むことによって、人類(humain)が研究の柱であるという原理を初めて地理学に与えた²²⁾。彼はこの原理によって、政治地理学的

独断や歴史家・経済学者による無責任な一般論に反駁し、デュルケーム (D. E. Durkheim, 1858~1917年) 社会学派の攻撃やル・プレー (P. F. G. Le Play, 1806~1882年) 流の地理的社会学論にも立ちむかわねばならなかった。それには人文地理学のプリンシプルとその領域を明確にすることが急がれた²³⁾。このような状況を強く意識したブリューヌは方法論的には師の地的統一の理念より「相関の原理」(principe de connexité) を、そして人類の歴史性・社会性に発する心理的作用から「運動の原理」(principe d'activité) を導き出すとともに、人文地理学プロパーの領域を景観に求め(シュリータ <O. Chülter> などのドイツ景観学派の影響を受けている)、歴史的社会的存在としての人類が自然環境とどのように対応し、自然に働きかけ、この地上に地理的構造体をこしらえているかを整理し、体系化しようと試みた。

主著、『人文地理学』において(注6, 46-67)、増大する地理的複合の錯綜状況を整理し体系化するには、主観的人文要素を可能な限り混合することなく、人類の基本的必要(基本的には食べること、眠ること、着ること)を充たすための直接的な人類の組織化された自然への働きかけとその結果を引き出し整序するという初歩的作業から取り掛からねばならないと述べている。これら物象を研究する分野が「基礎的人文地理学」であり、それを狭義の「人文地理学」とする。彼によれば、人文地理学には当然、自然の人文化に関する歴史的・経済的・社会的・政治的・文化的諸要素が入ってくるが、それらの自然との直接的関わり合いは薄く、しかもその間に人類集団の意志や心理的作用が介在して複雑でかつ錯綜した様相を呈しているから、不用意にそこへ入り込んではいけぬ。それらは「歴史の地理」として、基礎的人文地理学の成果のうえに立って慎重に究明されるべきである。かくして彼は、一つの試論であり未完成なものであると断りつつ、次のような体系を示した(注6, 921-927, 注12, 100-105)。

第I部：本来的・基礎的人文地理学

序章 ①人文活動の自然的枠：土壌・気候・動植物の自然相，②地理的作用体としての人類（自然事象に対する改変作用要素としての働きを研究する）。

- S 1 第一基礎的事象（非生産的占拠）：家屋と道路（集住，分散の居住，都市，交通）
- S 2 第二基礎的事象（創造的占拠）：耕作と牧畜（輪作，選択，馴化，移牧，遊牧，半遊牧）
- S 3 第三基礎的事象（破壊的占拠）：漁撈と狩猟，採石と鉱業（養魚業，工業，

輸送も入る)

S 4 民族的社会的地理学の基礎的諸事象：基礎的事象の三連鎖：生活様式と地域経済

S 5 地誌の基礎的要素

第Ⅱ部：歴史の地理

S 1 人口地理：①静態的事象（食糧の一般地理が補完）、②動態的事象（軍事地理が入る）

S 2 経済地理：①生産の一般地理（工業地理が入る）、②輸送の一般地理、③交易の一般地理

S 3 純政治地理：国家と領土（行政地理が補完）、道路と境界、首府、国家連合の地理学的基礎と条件、原料の地理、交易の闘いなど

S 4 文明の地理（広義には社会地理）：①国民性・人種・言語・宗教、②知的・芸術的・技術的秩序の表明、③集团的態度・共同体的心性・法律的社会的組織に関する諸事実

S 5 極致としての地誌

1.2 体系論の問題点について

多くの地理学者がブリュエヌのこの人文地理学体系論に批判ないし反論を加えている。さすがに、師ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは的確に彼の体系の問題点を以下のように指摘している（注7参照）。ブリュエヌの『人文地理学』の試みは従来の政治地理や経済地理をより幅広いプログラムのもとに包摂しえているし、非常に教育的であって（第二版まで「人文地理の教育」の章が設けられていたが、第三版以降は削られている）、人文地理学の普及に貢献しうる。そして、「社会的経済的諸事実に対する危なっかしい説明」を避けて、領域の拡大によってプリンシプルを見失うおそれをたえずもつこの学の危険性から逃れている。しかし、その「過度の厳密さ」がかえってこの学の領域を狭めることになりはしないか。そのうえ領域の定義そのものが十分に包括的であろうか—例えば「交通」（circulation）という地理学的概念を「道路」という形態にカテゴリー化して、はたしてその地理的全容を包摂しうるか—と危惧の念を表明している（注6、IV頁）。さらに言葉を継いで、その体系（基礎的人文地理学を指すと思われる）においては、集合的・集团的事象の研究が除外されている。外部的な形態だけからでは人類の地理的活動の因果関係を極められないのではないかと疑問を投げかけている。ジンメルマン（M. Zimmermann）もほぼ同様な見解を述べて

いる（注7参照）。

ブリューヌの体系論の本質はその二分割論にある。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ、ジンメルマン、ソール（M. Sorre）²⁴らの批判はまさしくこの点を衝いている。ブリューヌはこの二分割論（「基礎的人文地理学」と「歴史の地理」）の根拠を何に求めたか。それは、人文地理学プロパーの領域が景観ないし物象（*phenomène matériel*）にありとする観点と人類集団の基本的諸要求の充足のための諸事象を人文地理の根底におこうとする立場、この2点である。

景観論はフンボルト以来、ドイツにおいてオッペル（A. Oppel）、ヴィンマー（J. Wimmer）、シュリータ、パッサルゲ（S. Passarge）、バンゼ（E. Banse）らによって継承され発展してきた²⁵。フランスにおける景観論者の代表とみなされる（同世代に当たるシュリータの景観論とは、歴史性の追求の仕方において席を同じくしない²⁶、注21のR. Dickinson, 118頁, 133頁）ブリューヌは、この地上における自然の影響と人類の地理的作用の「しるし」としての可視的現象が人文地理学の直接の対象であると定義し、物質的現象系となんらの関係を有さない非可視的現象ないし要素は地理学の直接の対象とはならないと限定した。

彼はこの可視的現象＝景観の主たる要素を人文地理学の三つの基礎的事象と呼んで（前述の「要約的分類」を参照されたい）、他と区別し、それらとそれらの連鎖事象をもって人文地理学の基礎的な分野、ある意味では狭義の人文地理学とみなしようと規定した。かくして、彼における景観は「基礎的人文地理学」に入る主たる景観と「歴史の地理」に分類される従なる景観とに分かたれることになる。後者については、ブリューヌは明確に規定していないが、要約的分類を検討すれば了解されるように、人口移動の景観・工業景観・芸術景観などが想定されている。もちろん、この分野では景観分析よりも、その内に入ってそうした景観をもたらしている非物象的要因を極めることに重点がおかれている。この景観の2分は体系における2分に対応するものであり、彼の景観論を特色づける1要素である。しかし、彼が景観をとおして上記の諸事象の地理的理解をとげようとする景観論の立場に立つことには変わりがない。

この景観論的体系論に対して、ある地理的事象の全体がはたして損なわれることなく景観概念にカテゴリー化されるかという先ほどのヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの疑問が提出される。「交通」はもちろんのこと、人口現象という一つの地理的概念も家屋という景観概念の中に盛りきれない。そこで、ブリューヌは人口の静態的・動態的諸現象という最も基本的な要素を「歴史の地理」に分類せざるをえなくなっている。このような事例をあげればきりが無い。このように、景観に主たる基準を求める分類

の不備は一連の地理的現象を分断し、二元的に論じるはめに陥る点において暴露される。

ブリュエヌはヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの生活様式論を独自なかたちで採り入れることによってこの批判を和らげようと努めた。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは景観と生活様式概念を結びつけて、個々の景観 (paysage) の分析よりも、地域的にまとまり、調和的な生態的連鎖をなす「相観」(physionomie) をその「アンサンブル」(ensemble) において研究することの方が大切であるとする。なぜなら、われわれは地的事象の一体性をこわしてはならないし、むしろ個々の事象を関係づけることによってより深い理解へと到達しうるからである。そこで、ブリュエヌも基礎的事象の個別研究のあとに、それらが地域的にある連鎖をなしてあらわれることを踏まえて、基礎的事象の三連鎖の研究、すなわち地域経済 (économie régionale ≒ genre de vie = 生活様式) の研究を付け加えている。ここで、彼があえて「生活様式」よりも「地域経済」を表面に出したかといえ、ば、「生活様式」の概念が基礎的事象の三連鎖より幅広い内容を有しており、むしろそれを越えない経済現象に絞って「地域経済」の研究とした方が彼の体系論と符合したからである。彼は一応こうした処置でもって、基礎的事象の三連鎖を断ち切るという不始末をせずに済んだ。

さらにブリュエヌは「基礎的人文地理学」と「歴史の地理」を連結することになる。そのために、この「地域経済」をより象徴的な、そしてより一般的な仕事 (travail) という概念に置き換えてみる。それは生産・労働・分配といった人類の集団生活の最初に生じる基本的な諸要素を意味する。この集合的概念に、生産物とそれに直接かかわる物象系 (穀物倉・耕地・牧草・田植え・アルプの共同放牧など) とそれら物象にある糸でもって結ばれる非物象系 (流通機構・土地所有制度・商品化・共労組織など) とが表象されるとみなし、この「仕事」が歴史と地理 (注6, 800頁) を、そして社会と地理 (注6, 54-56) を結びつけるとしている。そこでは、自然的環境 ⇔ 仕事 ⇔ 生活様式 (≒ 地域経済) ⇔ 諸社会組織 (経済的・社会的・政治的・文化的組織) ならびに関連する非物象系がある関連において繋がっているとみなされている。その絆が次の第3節において取り上げる「心理的要素」である。したがって、彼の体系における二元論の克服はその理論のいかんにかかっているといえる。その詳細は次節に譲るとして、その結論だけを示せば、それは自から結合因子としての有意性を放棄しているために、彼の体系論は上記の関連事象の合理的理解を果たしうるという資格を失っている。そのことは、地理的事象を地的統一に基づいてアンサンブルに理解するという基本理念が体系論においてまず崩されてしまっていることを意味する。

筆が走って景観論から二元論へ、さらに心理的要素の展開へと進んでしまったが、

それはブリューヌの地理学体系論におけるそれら3要素（体系論と直接かかわるのは前2者であるが、第三の要素は二元論を克服する役割を担わされていた）の不即不離性を物語っている。かくして、われわれは彼の体系論に対して、①景観の二分、②狭い範囲でしか景観の連鎖を極められない、③自然的環境と対応してあらわれてくる人類の主体的条件との関連において景観を合理的に把握するということができない（「基礎的人文地理」と「歴史の地理」とがうまく紡ぎ合わされていない）、④その結果として、基礎的人文地理のまったくの形態論化、⑤地理的事象の全一性が分断されてしまうといった欠点が列挙されることになる。それら欠点はまさしく前述の三つの基本的な誤りに起因している。

なお、ブリューヌの研究（その主眼は「基礎的人文地理」の分類的研究にあった）が人類の歴史性や社会性を無視ないし軽視したものであるとして批判されるが（飯塚、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ、ジンメルマン、マルトンヌ）、それらが彼の体系論との関係を抜きにしてもちだされているのはいささか不親切な批判というべきであろう。彼の本心は、それらの要素を無視ないし軽視するところにはなかった。だから、「彼自身はむしろそれらにも同等な興味を示した」（R. Dickinson, 注21, 214頁）とか、「後年の版では、歴史はより広い場所を占め、人類そのものがいっそう検証されている」と付け加えたいくなる（E. de Martonne, 注13, 551頁）。それでも、なおかつそうした批判が有効であるのは、ブリューヌの本音にかかわらず、体系論的誤りが彼をそうした罫へと導き入れたからである（それには、「心理的要素の介在」という方法論も手を貸している）。やはり、その点をはっきりさせておくべきであろう。

1.3 生活様式と地域経済論

前述したところより、体系論の一つの要をなす「生活様式」ならびに「地域経済」という概念の内容を検討し、その地理学概念としての意義を吟味しておく必要がある。

ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは「地的統一」の理念に基づいて、地方的相観に組織的・永続的に刻印されて行く生活内容に同質的な、そしてアンサンブルな特性を見出し²⁷⁾、それを「生活様式」と名づけた。それは種々の「生活装備」とも呼ぶべき物象—栄養手段、衣服、住居、道具類、武具類、家具類、構築物、年中行事表など²⁸⁾—を通して把握される集团的・地域的概念である。それらには一定の社会集団の「ライトモチーフ」（Leitmotiv）とも呼ぶべき伝統的・集団的精神ないし価値観が反映されており、より広義には文明（civilisation）に通じるものといえる。したがって、生活

様式の研究においては、個々の研究よりもそれらに関連づけている要素を見抜き、その全体としての姿をつかみとることが重要である（注21, ブラーシュの下巻, 264-268, 292頁, 注28, 14頁）。この概念はとかくの批判を受けながらも、ながくフランス地理学の指導理念の一つとして継承発展された²⁹⁾。ブリュエヌも師のこの概念を、人類集団の伝統と要求の人文的複合体、自然環境の卓越と集団的生活の諸形態として正しく受け止め（注6, 910頁）、その全体と諸連関をとらえることが重要であり、物象の中へある因果関係をもって忍び込んでいる集団の精神も等閑に付してはならないと述べている（注6, 152-156, 910-912）。

しかし、ブリュエヌは生活様式に関連して次の四つの独特な見解ないし、より強い立場を表明している。①ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの「自然地域」(région naturelle) 論³⁰⁾では、「自然的地域」(région physique) と人類の「歴史的地域」(région historique) とはおおむね整合し、等質的な生活様式がそこに営まれる点により強く出された。ブリュエヌはそれらが必ずしも整合しないで、一つのアンサンブルな自然的地域に異なった生活様式が存在しうること、しかもそれらが地域経済としては相互補完的に固く結ばれた統一体をなしうること（地中海のパレアル諸島における農夫社会と漁夫社会のそれ…注6, 730-753）を強調した。そして、彼は自然地域が自然的地域を基盤としながらも、必ずしもそれに整合することなく、むしろ経済的・政治的統一体として形成される歴史的地域によって融合されるべきである（研究過程としては、両者の個別研究からその融合へと進む）とした。②上記①で述べた事実は自然地域における生活様式の複合的存在を是認することを意味する。③ブリュエヌ自身ははっきりとはいっていないが、彼のいう基礎的諸事象から“歴史の地理”の領域にまでわたる非常に幅広い概念としての生活様式の全体を一気に解き明かすことは困難であるとみたようである。

そこで、彼は生活様式の基礎的部分を占める基礎的諸事象の地域的研究＝地域経済の研究を先行させる。このことと①とを勘案するならば、彼が歴史的地域の形成における主因子として地域経済＝経済地域を措定していることが了解される。④上記の①～③を地域論的視点から整理すれば、そこに地域の複合的認識、機能的認識の芽を見出すことができよう。ジュイアール (E. Juillard) は晩年のブラーシュが都市における新たな地域形成に注目した点を指摘し（注26, 14-15）、その研究が直接の後継者たちに引きつがれなかったと述べている。しかし、その影響はブリュエヌにはっきりとみられる（ただし、彼も実証的研究まではいかなかったが）。

2 ブリュエヌの方法論——ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュとの比較——

『人文地理学』の最終章で、地理学精神というタイトルのもとに、①現実の観察、②それらの集合・比較・分類、③正確な場所の観念、地図と図表、④実証的「批判的」精神について、縷々説いている。そうした精神ないし方法が隣接諸科学、ことに歴史学・社会学・政治経済学・人類学などいかにあらわれているかを説明し、その精神においてそれら諸科学と地理学の協調が可能となることを示唆するとともに、地理学が景観に埋没することなく、その領分において非物質的現象にまで迫りうる素地をそこに見出している。これは師ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの地理学精神の写しであるといえよう。なお「批判的」精神にブリュエヌの面目がよくあらわれている。具体的には「批判的」地理学は「歴史の地理」の精神ないし方法によって裏付けられている。すなわち、地理学者が自己の純領域（基礎的諸事象）を出て他と隣接する分野を対象とする場合に、あくまでも自己の立場をまもり、その実証的精神によって他者の論理的独走をチェックし、地理学的構築をなしとげるといふ「歴史の地理」の方法論がそこに表明されている。

ブリュエヌの方法論の中心は可能論的立場と「心理的要素の介在」論にある。その他に、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュとは少しく異なった立場に立つ地的統一論＝「相関の原理」と、彼の思考様式の典型的パターンをなす段階論的、二元論的方法があげられる。「心理的要素の介在」論については次節に改めて述べるとして、本節では他の3項目についてヴィダル・ド・ラ・ブラーシュと比較しつつ彼の方法論を明らかにしたい。

2.1 地的統一論＝相関の原理

われわれの生存する地球は単一であり、その諸部分は全体との関連性を免れえない。お互いに相互依存の関係にある。もし、地的現象に法則性・一般性が存在するならば、諸部分が統合された全体においてこそその全容が認識されうるであろうし、必然的に全体における法則性・統一性は諸部分にも反映されているであろう。したがって、地的諸部分を相互に結びつけている諸要素や諸部分の因果関係を明らかにし、それらを比較統合することによって、一般性・法則性の理解に到達しうる^{31) 32)}（その他にヴィダル・ド・ラ・ブラーシュについては注20, 129-130, 139-142）。

「地的統一」という概念は原初的には自然の全一性に帰せられるが、そのことは地

理的現象における自然環境の原因としての優越性を前提とすることにはならない。なぜなら、歴史的・社会的存在としての人類は自然に積極的に適応したり、それを改変したりしながら地上における相観を人文化（humaniser）している。この「人文化された自然」（nature humanisée）を地的統一の原理によって整序することこそ人文地理学の課題である^{33) 34)}。この概念においては諸部分・特殊性・個別性よりも全体・一般性・相関性という観点が優位に立つ（ただし、研究過程として、諸部分の研究＝地誌的研究の蓄積が先行する）。この地的統一の概念は、とかくの批判を受けながらも、ながくフランス地理学界の指導理念の一つとして大きな影響を与えてきた³⁵⁾。

ブリュエヌもヴィダル・ド・ラ・ブラーシュのこの概念を積極的に採り入れた。その主張するところはほぼ師のそれと軌を一にしているが、特に相関性という面を強く取り上げた。その結果、統一性、アンサンブルという面が後退した印象を与える。これは彼の二元論的体系論と密接に絡んでいる。しかし、相関性、因果関係の究明は地的統一の究明へとつながるのであって、彼がその究明を二義的なものと考えたとはいえない。ただ相関性といった方が彼の体系論と符合するからであったとみるのが素直な解釈ではないかと思う。なお、この地的統一の研究は一般地理学を志向することでもあるわけだが、ブリュエヌも師も、その過程についてはほぼ似たことをいっている。ただ、ブリュエヌが「地的統一の究明による一般性の探求」に「心理的要素」を介在せしめることによって、一般地理学への道のりをより具体化させることができると主張した点に彼の積極的な姿勢がうかがえる。その評価については次節に譲る。

最後に、ブリュエヌが「人類集団が一定の努力と土地占拠様式に従う結果として受ける一般的影響を抽出する方向に向かう」社会地理学が「人文地理学における研究の諸結果の一つであるはずのもの（一般地理学を指している）をより明確に理解することを可能にする」（注6，829頁……小括弧内は筆者注）といっている点を指摘しておきたい。

2.2 可能論的立場

ラッツェルにおいて強く主張された自然科学的認識論、有機体的な自然観に基づく生物生態学的研究は、自然の法則性に焦点をあわせて地理的現象を科学的・機械論的に体系化することを目指した。同じく生物生態学的方法を用いたヴィダル・ド・ラ・ブラーシュではあったが、優れた歴史的感覚を身につけた彼はラッツェルの認識論がドグマティックな決定論につながるとして、地理学における人類の正当な位置の回復に努めた（ラッツェル批判は注33に詳しい）。

そこで、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは歴史的・社会的存在としての人類が自然に適応し、あるいは改変しながらこの地上をいかに人文化しているかを地的統一の概念によって整序すべしとした。このような立場をフェーブ（L. Febvre）は環境可能論と呼んだ³⁶⁾（しかし、この命名がヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの主張を誤解させ、自由論、機会主義の印象を与える不用意なものであったことは多くの識者が指摘しているところである。もちろんフェーブ自身もそうした意図でいったのではない³⁷⁾）。ブリュヌはテーヌ（H. Taine）の機械論的決定論やゴビノー（A. Gobineau）の人類論、ヘーゲル（G. W. F. Hegel）の精神論を正面きって非難した。ラッツェルについては、その地理学発達史上における功績を高く評価しながらも、その機械論的決定論と晩年における政治地理学の拡大解釈にはとうてい領けないとした（以上、注32, 1-2, 注12, 58-66）。

ブリュヌは人文地理学の対象をこの地上における人文活動が関与する諸現象と規定し、地理的現象を自然への人類の作用として、あるいはその結果としてとらえる立場に立ち、自然が人類の活動にいかなる影響を与えているかという観点において地理的事象を体系化する立場と対峙した。たしかに、自然の諸力は直接・間接的に人類の諸活動に力強い影響を与えており（制限的〈restrictif〉作用と影響〈influent〉とに分けている）、人類は自然の枠組み（cadre）を決して超えることはできない。人類はそれによく適応し、せいぜい改変して生活の利便性をより高めるにすぎない。文明がいかに進もうとも人類の自然への「粘着性」が減ずることはない。かく認めるブリュヌではあるが、人間の適応能力と創造的能力に注目し、かつ地理学の目的を省察すれば、こうした自然の力を絶対的なものとしたり、運命的なものとして受けとることはできないとし、次のようにいう。「もし、この世の全ての政治的・経済的・社会的歴史が……人類のイニシアティブによってその根底からひっくりかえされるか、またはそうなりつつあるのなら、それは人類の意志が地表面そのものを変えるからであり、いわば人類の意志がそこに地理的に具象化されているのだといえる」。「人類の生活における変化、多様化には人類の努力が大きく関係している……と同時に、彼らが位置する場の自然的与件、他との関連位置によっても影響されている」、「人類ははっきりと土地に依拠するとはいえ、同時に彼はその空間にみずから創出したものにも依拠している」（傍点は筆者注。注32, 7頁, 10頁）。

かくして、自然的環境のもとに、社会的環境と対応しつつ創造的に人類は多数の力によってこの地上を人文化〈humaniser〉する。当然、その研究には歴史的・社会的な諸要素による解明が組み込まねばならない。ここで、彼はヴィダル・ド・ラ・ブ

ラーシュ的立場から離れて、基礎的諸事象の研究を踏まえ、「心理的要素」を介してそれらを整序しようとした。その点についての検討は次項に譲って、ここではブリュエヌの人類の歴史性・社会性に関する認識がヴィダル・ド・ラ・ブラーシュと異ならず、決して低いものでなかったこと、言葉のうえではよりはっきりとその点を主張したことを指摘しておきたい。この点について彼が非難されるとすれば、それはその研究方法と体系においてである。その点を間違ってはならない。

2.3 若干の方法論的問題

ブリュエヌの発言やマルトンヌの評からすれば、彼は机上であれこれと思案する謙譲家タイプではなくて、自己の信ずるところを素直、明快に表明したようである。また、彼の経歴をみればわかるように、その活動は単に地理学の範囲にとどまらず、行政の手腕をもつ実務家として社会的な面にまで及んだ。こうしたプラグマティストとしての一面が彼の地理学論にもよくあらわれている。彼は次のように明快に割り切る。地理学は記述より説明へ、枚挙より一般へ、観察より論理へ、個別研究より一般研究へ、物質的要素より非物質的要素へ、そして簡単な現象より複雑な現象へと段階を踏んで進む方が研究のスムーズな推進に有効であると。確かに、上述のようなステップ論はヴィダル・ド・ラ・ブラーシュをはじめ多くの地理学者が披歴しているところであり、それにあえて反対する理由も見当たらない。しかし、他の人々が慎重にこのステップを踏みしめていったのに比べ、ブリュエヌはその間に介在するやも知れぬ落とし穴に気を配ろうともせず、いとも簡単に二元論を容認しつつ、その上を滑っていくようにみえる。われわれにはそうした単純明快な論理の展開は危なっかしいものに見える。まさに、その延長上に体系的二元論が位置するわけである。

その他にも、比較論における歴史的分析が弱く平板な形態論的比較に終わっていることや構造的・機能的把握に乏しいといった欠点があげられよう（後者については、この時代の地理学者に求めることは無理かもしれない）。

3 「心理的要素の介在」論について

3.1 「心理的要素の介在」の意味

地理的現象の変化と多様性の鍵が人類の側にあるとするブリュエヌの主張については既に述べた。では人類の側の条件とは何か。それは、諸集団がそれぞれもつところ

の歴史的な性格、政治制度、生産様式、経済制度、社会制度、文化、宗教などであり、それは社会的・文化的環境または社会・文化特性とってよいだろう。こうした諸要素が自然的環境との対応において人類の地理的行為にどのように影響しているかをまず解きほぐさねばならない。

ブリュヌは人類集団や諸個人に原初的に内在し行為の原動力となっている衣・食・住といった基本的生理的欲求、安全性や安楽の希望、あるいは社会的・個人的な価値観、そして諸発見や発明にみられる夢や幻想に注目する。人類のこうした生理的欲求 (désir)、価値観 (valeur)、希望 (espoir) が実現される過程とその結果は一律でない。それは、そうした諸ニーズがそれぞれの置かれた自然環境の拘束と影響のもとで諸集団のもつ生産様式・伝統・文化などの社会的環境に影響されて一定の方向性を与えられるからである。それをベルグソン流の「注意の方向」(direction d'attention, 後述)と呼んでいる。人類の諸行為の選択はそれに沿ってなされる。だから、諸ニーズの充足のための行為の選択はまったく自由ではなくて、そこに一定の「自由選択の限界」(horizon de libre choix)ないし「選択の可能性」(puissance d'élection)とも呼ぶべき枠が存在するという(注6, 881-891, 注32, 31頁)。

かくして一定の行為の方向へと選択されると、改めて人類は自己のニーズと自然環境とを計り、自己の行為を目的完遂へと組織だてねばならない。この時点において人類の内側にある種の心理的作用が生じる。それは農耕のための水の確保への慮りであり、安全への志向であり、孤立に対処するための自給自足への配慮であったりする。こうした心理的作用にこそ人類集団がおかれた自然環境の影響と彼らの社会特性が一点に集結してあらわれている。この地理的諸要因の心理的反響であるこの「心理的要素」こそ、「人間と自然的要因の両方に関連して諸事実を配分し秩序だてることを可能にする……全ての人文地理学的研究において優越する繊細かつ複雑な要素である」(注6, 890-891)として、それが地理的現象の起源、変化、因果関係を整理し、秩序だてる要因であることをブリュヌは主張している。まさしく、それは決定論者に対するアンチテーゼとして提出されている³⁸⁾(注32, 32頁)。

彼はこの心理的要素を一次的ないし基本的な要素(一次的心理要素)と二次的な要素(二次的心理要素)とに分ける。前者は人類の基本的ニーズの充足過程にあらわれる心理的作用であり、それは基礎的諸事象を整序する鍵である。この基礎的諸事象に付随して、それらを補完するために、あるいは影響を受けて発生する諸ニーズの実現過程にあらわれる心理的作用が二次的心理要素である。それはいわゆる「歴史の地理」の諸事象を基礎的諸事象と関連づける要素であり、一次的心理要素の展開でもある。

したがって、一次的心理要素と基礎的諸事象を通して二次的心理作用は理解される。かくして実現された基礎的諸事象と二次的諸現象は、次なる段階において基本的ニーズ→一次的心理作用過程を規定する社会的環境として作用する。これが、連続的に地理的事象が更新されて行くプロセスである（注6，893-894，注32，12頁）。

ところで、一次的心理要素の中でも、特に「一定の」とか「一般的」とかいった形容詞が付される場合がある。それは、農耕における水の安定供給の確保とか孤立社会における自給自足への配慮といった心理的作用がある程度の一般性をもつことを指している。ただし、その結果としてあらわれる地理的現象は、自然環境と社会環境のもとで多様であり、そこに必然性を求めることはできないとして、ブリュエヌは心理的決定論の印象を与えることを慎重に避けている。ただし、心理的要素が不安定な必然性に欠ける人類集団と自然との関係を整理する一定の基準としての役割を果たし、地理的諸現象を整序、分類するのに役立つとしている。すなわち、それを軸に、特定の自然環境と集団の社会特性がどのようにからみあって地理的事象をうんでいるかを整理しようと（注17において、水利制度の諸類型を考察している）。

3.2 飯塚の批判点

飯塚は「ブリュエヌにおける心理的相対主義について」と題して、「個人の主観的な意欲あるいは個人心理的要因を手掛かりとして理解しようとする」（注19，89頁）ブリュエヌの心理的相対主義は社会的、歴史的条件を一切無視し、個別的・機会主義的な可能論（氏は自由論と解している）に走り、地人相関論と同様な抜け道のない循環論に陥っているとして厳しく批判している。飯塚のこの批判はブリュエヌの論理的欠陥を鋭く衝いている。しかし、批判するに急で、ブリュエヌの論理の展開を抜きにし、一方的に決めつけている感が深い。

ブリュエヌのいう心理的要素は個人的なものだけを指すのではなくて、諸個人を包摂した集団的概念であることは、イベリア半島における水利制度の多様性は「一定の地理的枠の中で生活する人類集団〈un groupe humain〉の一般的心理的状态のあらわれとして地理学者の興味を引く」（注6，794頁，傍点は筆者）と述べていることや、その形成過程にあらわれる社会的環境の制約性に照らしても明白である。また、飯塚は、社会的・歴史的条件が無視されていると批判しているが、これまで論じてきたところからも了解されるように、ブリュエヌのいう心理的要素はそもそも人類集団の社会性と深く係わる（特に二次的心理要素）ものであって、まったく社会性を無視した無垢な個人の心理を指すのではない。無時間的概念や単なる循環論でないことも、先

ほど述べた一次的心理→二次的心理→一次的心理という連続的更新・変化の論理からもはっきりしている³⁹⁾。

とはいえ、ブリューヌが人類の社会性・歴史性を正しく学の中へ組み入れたか、また彼の「心理的要素の介在」論を通してわれわれは地理的事象の正しい理解へと導かれうるかといえ、結論的には否といわざるをえない。以下、彼の論理的欠陥を指摘し、どこがどのように間違っているのかを明らかにしたい。それは飯塚の論理の飛躍を埋めることにもなるし、ある展望への一つの足がかりをうることにもつながるであろう。

3.3 心理的作用の前過程のフレーム・ワークについて

社会学者パール (R. E. Pahl)⁴⁰⁾ は、地理学が社会科学としてよって立つ基礎的フレーム・ワークを精緻にすることに地理学者があまり熱心でないこと、「社会的存在としての人間」の研究の学としては、社会についてのフレーム・ワークが著しく欠如していたがために、そこに「価値観に影響されない地理学」(a value free geography) というお伽話が生まれる余地があったことを批判している。彼は著名な社会学者の諸説を引用し、人類の社会的行為をどのように理解すべきか、社会の仕組みとその変化に関する機能主義的アプローチなどを説明し、最後に地理学者がこうした社会学的理論を無視しえないのではないかと問うている。この問いかけは地理的事象の主体者としての人類の行為における社会性の解明に大きくかかわっているだけに、地理学はそれに答えていかなければならない。

さて、ブリューヌは、「自由選択の限界」、「選択の可能性」、「注意の方向」⁴¹⁾ (これについてはベルグソンの名をあげており、社会的秩序・習慣・伝統・道徳などが諸個人の行為を規定し、あるいは服従と責務の観念を諸個人にもたらすことを指しているものと思われる) とか呼んだ一連の人類の行為プロセスにみられる規定的作用について次のように述べている。すなわち、歴史性をもつその社会特有の社会制度・文化・慣習・伝統・価値観・政治制度・経済など (あるいは社会的環境といってもよい) が、自然環境と対応しつつ、人類集団の営為に規定的作用を行為 (集団的, 個人的) に及ぼすと。彼はこうした社会的諸要素の組み合わせの差異が地理的事象に大きく反映されていることを認めるが、地理学はそれ自体の解明を直接の対象とはしないし (注6, 794頁), それらが心理的要素の形成過程に果たす役割についても同様なことがいえる。地理学者は心理的要素 (一次的, 二次的) →地理的事象の形成過程においてそれらを取り扱うという。また、二次的心理作用の結果としての「歴史の地理」の諸事象

についても、「その出発点と一般的方向について地理学は関心をもつが、その最後の結果にまではかかわらない」（注6，794頁）とも述べている。すなわち、人類の社会性、歴史性に根ざす諸要素（社会的特性または環境）は心理的要素と基礎的諸事象に関係する範囲内で取り扱われる。

3.4 「心理的要素の介在」論の問題点

われわれは以上の検討を踏まえた上で、次のような問題点を指摘しうる。

(i) 心理的要素の形成過程そのものは地理学の範囲外であるとしているが、そうして抽出された心理的要素がはたしてどれほどの地理的有意性を備えているだろうか。既に述べたように、ブリュエヌは人類の基本的諸要求の充足過程の一コマとして、この心理的要素（例えば農耕社会における水利の安定への願い）を措定している。そこに限定された意味においてはあるが（というのは、自然環境の特性によって安定の願いは異なる）、分類基準（それを基準に基礎的諸事象にいかなる特性がみられるかを調べることによって、それぞれの農耕社会の歴史的・社会的な特性の偏差を測りうる）としては有意な一般性が認められるとしている。

しかし、一方ではブリュエヌはその心理的作用そのものが歴史的・社会的産物であることを認めている。いうまでもなく、基本的諸要求が自然環境との対応において歴史的に社会的ニーズとなり、具体的な選択がなされる（牧畜ではなくて農耕を選ぶ）ことによって生じる心理的作用は社会的・歴史的・自然的制限を受けている。地理学者はその社会集団がなぜ農耕を選んだかを問わずして地理的事象における人類の社会性や民族性や歴史性を証しうるだろうか。人類の社会性や歴史性が心理的要素に突然あらわれるのではないことは明らかである。まさに、その過程をネグレクトして、この人類の基本的欲求が基礎的諸事象を規定する根拠としてもちだされている点に問題がある。

そうした過程が省かれて出てくる一般的心理要素は非常に恣意的な要素であり、それを一般的とする根拠は乏しい。例えば、アンニヴィエール谷のモノグラフで、生活様式の諸局面の形成要因を孤立性による自給自足の心理作用に帰しているがごときは、なぜそうした心理的作用が働くのかを説明しなくては科学的価値を著しく欠くことになるといわれてもしかたあるまい（注2参照）。仮に、その一般性を認めて、それを基準に地理的諸事象を整理分類しても、そこに地理的事象における社会性、歴史性が合理的に整序されうるという保障はない。いくつかの項目のもとに分類することは可能である。しかし、それが人類の社会性、歴史性を地理的に整序しうる分類とし

での資格をうるためには、その分類に当ってそうした諸要素が考慮されねばならない。この作業を怠った分類は単なる組み合わせにしかすぎないといっても過言ではなからう。

残念ながら、ブリューヌの灌漑組織の類型化をみても（注17のエジプトにおける灌漑組織の冒頭の分類など）、そうした配慮が欠けているといわざるをえない。いずれにしても、彼のいうような意味の分類基準としての資格を一般的心理要素に認めることは困難である。さらに地理的現象の連続的更新の研究が一次的・二次的心理要素によって可能となるとしているが、これまで述べたようにそれら心理的要素の形成過程がネグレクトされていて、はたしてそれが可能であろうか。そこでは一連の地理的行為のプロセスは明らかに中断されてしまっている。筆者はその全過程を地理学の領域に組み入れよと主張しているわけではなく、その欠けた過程を論理的に埋めておく（一次的心理要素→基礎的諸事象→二次的心理連鎖→非基礎的諸事象という一連の検証過程が人類の社会性・歴史性を損なうことなく地理的事象を合理的に整序しようようにする）ことが必要であるということをお願いするのである。それを欠いた彼の論理がこのことを保証してくれる当てはない。

(ii) 一次的、二次的という心理要素の区分は彼の地理学体系の二分と対応する。この二分はある意味で重要な内容をもつ。というのは、心理的要素を二分するということは、その背後にある社会的ニーズを二分すること、すなわち基本的ニーズと派生的ニーズに分かつことを意味している。このニーズが社会集団の価値観の表明ないし社会の目標・方向性に規定されるとみるならば、それは社会の仕組みをレイアウトする基本的要素とみなしうる。もし、そうだとすれば基本的ニーズは社会の骨組みをレイアウトする核心的要素といえる。そして、派生的ニーズは基本的ニーズに方向性を与えられて出てくるものである。ブリューヌはこのことに直接触れてはいないが、実は一次的・二次的という区分の裏にはこのような論理も成り立つのである。ところが、彼のいう基本的ニーズとは何かといえば、衣・食・住といった基本的生理的欲求であり、その実現が基礎的諸事象ということになる。しかし、こうした欲求だけが社会の仕組みを方向づける基本的要素であろうか。いや、それ自体が基本的であるか否かも問われねばなるまい。ところが、ブリューヌはこの基本的欲求をアプリオリに措定し、その基本性についての検証やそれが因ってくる因果関係の究明を怠っている。したがって、一次的・二次的という区分は単なる体系論との兼ね合いにしかすぎず、そこに論理的必然性を認められない。また、社会的価値観にも触れているが、それが基本的ニーズに入るか否かは不明である。ブリューヌのこの辺の論述は不明確である。した

がって、ブリュエヌの二元論的なニーズ論には上記のような積極的な意味は込められていないと判断される。

(iii) ブリュエヌの心理的要素において、社会と諸部分または諸個人との関係がどのように考えられているかは、民族性、誇り、伝統、使徒的発奮といった「集団的はずみ」(impulsion collective) や群集心理を語り、ベルグソンの「注意の方向」に触れ、「人間は彼の目と大脳にある確かな世界を反映し……その一部は彼自身によるものである」(注32, 39頁)と述べているところから明らかであろう。個人、部分は全体社会のニーズ、価値観の影響を受け、方向性を与えられている。彼はそれを基礎的事象を通して読み取ろうとしている。われわれはその是非を論ずる前に、個人の発奮や努力あるいは発明、試行をどのように扱うべきか、社会は個人の活動にどのような規範をいかに課しているのかなどといった個人と社会の関係について論理的フレーム・ワークを用意しておかねばなるまい。ウェーバー (M. Weber) 流の自由意志が社会規範を受容することにより、人類は合理的行為を志向し、そこに科学的アプローチが可能になるという論理をわれわれはどう受けとるのかを検討することも必要である。従来、所与のものとして受けとってきた「社会的存在としての人間」の地理的フレーム・ワークを考えたいこの問題にた立ち帰るべきであろう (この問題については別の機会に改めて論じたい)。ブリュエヌについていえば、残念ながらそれ以上の論理の発展はない。ただ、彼が地理学を個人の自由意志に委任しなかったことは確かである。

3.5 「心理的要素の介在」論の止揚

ブリュエヌのこの理論は、基本的な論理が不整備でかつ厳密な検証を怠ったがために、地理的諸事象を因果関係において整序し、一般地理学へと進むには不十分で、そして未完成なものであることは覆い難い。しかし、それをまったく無意味な観念あるいは有害な見解として葬り去ってしまうべきだろうか。序論で述べたように、われわれは彼を完全に乗り越えたとはいえないのであって、彼の理論を叩き台として十分に検討を加え、そこからなんらかの展望を試みるのがより有意義であろう。

ここまで彼の理論の問題点を指摘してきたが、その一々をここでは繰り返さない。筆者はここで次の4点を指摘しておきたい。①人類の地理的主体性と関連づけて、地理的事象の因果関係を整理しようとした彼の意図は現在でも有効である。②彼があえて地理学の対象でないと宣言した過程 (地理的現象の選択過程において歴史的・社会的要素が自然環境との対応においてどのように作用しているか) を解明することが地

理的事象の歴史的・社会的解明に欠かせない。それを十分に検証することによって地理的事象の歴史的プロセスと変化の仕組みを理解し、社会構造（広義）の核心をレイアウトしているその社会の方向性の解明へと進む足がかりをうることになる。③地理的事象において、基礎的構造と派生的構造という上部・下部構造論的な仕組みが存在するかどうかの検討を行う。④社会と個人の関係についての基礎的フレーム・ワークの構成について検証する。これらがブリューヌから得られる教訓である。これらの課題は社会地理学の基本的命題であるのみならず、広く人文地理学全体が考えねばならない事柄である。

最後に、前節において課題として残した運動論・可能論と心理的要素の関連について言及しておこう。人間と自然の間には不安定で変化・発展する心理的要素が介在するゆえに、両者の結びつきを不動のものと考えるはいけない。「われわれが取り扱うのは多種多様で複雑な社会的要素であり人文的要素であり、社会と人間であり、また生活である…」(注6, 894頁)と述べているところから明らかなように、地理的事象は連続的に変化・発展するという運動を行っており、その原因は人類の側にあるのである。彼はそれを心理的要素を通して把握しようとした。しかし、既に述べたようにその有効性は疑わしく、また歴史的モデルとしても不備なものであった。ゆえに運動論についても同様な批判が下されるであろう。しかし、地理的事象を歴史的運動として認識するブリューヌの見解は有効であろう。彼の可能論的立場の骨組みをなすのがこの「心理的要素の介在」論であることは既に理解されたであろう。そして、心理的要素が人類の自由意志によるのではなく、自然環境と社会的環境の制約ないし影響のもとにあらわれることも（この点についての彼の文脈は必ずしも明解ではないが）。したがって、彼の可能論を自由論とか機会主義とは断定しえない。しかし、前述のごとく心理的要素の社会的・歴史的解明を怠ったがために、その上に構築された彼の可能論も、ともすれば「流転きわまりない」、「うつろい易い波のようなものである」、「人文地理学は妥協の王国であり……」といった無原則的な変化に与したような発言へとつながる。

むすび

師ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュから豊かな教えを受けたブリューヌはラッツェルの世界を抜け出て、新たに人文地理学を体系化・理論化しようと試みた。彼は景観概

念と人類の基本的諸要求に拠り所を求めて、地理的現象を物象と非物象の世界に分かち、その溝を人類の社会性・歴史性と自然環境の接点にあらわれるとみなす心理的要素でもって埋め、諸事象を因果関係において関連づけようとした。しかし、その試みは決して成功したとはいえず、多くの欠点が指摘された。ことに体系論における二元性と心理的要素の数々の理論的不備が彼の地理学に致命的な打撃を与えた。それは彼の地理学理論と実践のあらゆる局面に忍び込み、鋭い理論を歪め、豊饒であるはずのモノグラフを損なっている。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュやジンメルマンがブリュヌに放った“先蹤者がもたらした宝を無視している”という批判を改めてかみしめたい。しかし、ブリュヌの地理的生涯をわれわれははたして零ないしマイナスに帰してしまってよいだろうか。彼の意図のユニークさと鋭いひらめきは、そこから何物かを汲みとろうとする者には強い刺激と示唆を与えるであろう。

注

- 1) Brunhes, J. (1902) *De vorticum opera, seu quo modo et quatenus aquae currentes per vortices circumlate ad terram exedendam operam navant* en Latin. 同年にフランス語版, *Le travail des eaux courantes : la tactique des tourbillons, Mem. Soc. Fribourg Sc. Nat.*, pp.153-224が出る。
Brunhes, J. (1907) Sur les contradictions de l'érosion glaciaire, *C, R. Acad. des Sciences*, CXLII, pp.1234-1235.
Brunhes, J. (1907) Sur les relations entre l'érosion glaciaire et l'érosion fluviale, *ibid.*, CXLIV, pp. 936-938.
- 2) Brunhes, J. et P. Girardin (1906) Les groupes d' habitations du Val d'Anniviers, *A.G.*, N° 82, pp.329-351. この論文は、注6の661-691頁にも収録されている。
- 3) 家族の惜しめない助力をも得ている。最初は妻が後年には娘が助け、死後も彼の著作の普及に努めた。
- 4) 彼は社会問題にも興味を示した。スイス在任中はストライキの調停委員を務め、第一次世界大戦中にはスイスの外交委員会に関係した。晩年にはフランスの大銀行の理事として在った。教育方面では「初中等教育提要」と壁掛用地図を作成した。
- 5) 1898年、“Michelet の mémoire”で Académie française から雄弁賞を授与された。
- 6) *La géographie humaine, essai de la classification positive, principes et exemples*, Paris, F. Alcan. 初版は1910年。第2版1912年。第3版1925年では大幅に増補・改訂されるとともに写真が別冊にされ、3巻となった。彼の死後に、彼の補遺手稿をもとに娘のM. Jean Brunhes DelamarreとP. Deffontainesの手で appendixを付け4版(1934年)が出版された(この版がブリュヌの手になる最終版と考えてよい…筆者はこの第4版を元本として、ロンドン版と日本版を参照した)。さらに1947年には、前述の2者によって縮小版が発行された。
- 7) P. Vidal de la Blache の Académie des sciences morales et politiques への推薦文で、Académie des sciences morales et politiques (1911) *Science et travaux*, 71'année, 2° Série, pp.117-120に所収。『人文地理学』(1934年版)の巻頭に収録されている。Zimmermann, M. (1911) *La géographie humaine : d' après J. Brunhes, A.G.*, N° 110, pp.97-111.

- 8) Bowman, I. et R. E. Dodge (eds.), I. C. Le Compte (trans). (1920) *Human geography: an attempt at a positive classification, principles and examples*. 本書は初版本によっている。
- 9) 松尾俊郎抄訳 (1929) 『人文地理学』, 古今書院。アメリカ版 (注 8) の抄訳。
- 10) Row, E. F. (trans.) (1952) *Human geography*, Harrap, London (1947年の縮小版) による。
- 11) Brunhes, J., P. Girardin, et P. Deffontaines (1920, 1926) *Géographie humaine de la France* (2 volumes), Société de l'histoire nationale, Paris, G. Honataux (dirig.) *Histoire de la nation française* シリーズに所収。
- 12) Brunhes, J. (1925) Human geography. in L. F. Ward (ed.) *The history and prospects of th social sciences*, Alfred A. Knopf, New York, pp.55-105.
- 13) E. de Martonne は A.G., N° 152, 1931, pp.549-553. において皮肉たっぷりの、しかし人柄をよく掘り下げた彼の略伝を記している。マルトンスはプリユースの人文地理学の成功は大衆うけする雄弁と学問的には問題の多い明快な割り切りによるものであり、そうして得られた名声は彼一人に帰するものではないと言明している。
- 14) Brunhes, J. et C. Vaillaux (1921) *Géographie de l'histoire, géographie de la paix et guerre sur terre et sur mer*, Felix Alcan, Paris.
- 15) Brunhes, J. (trad.) (1928) *Le monde nouveaux, tableau général de la géographie politique universelle* (I. Bowman (1928): *The new world: Problems in political geography*, Yonkers-on-Hudson の翻訳)。
- 16) Brunhes, J. et M. J-Brunhes Delamarre (1930) *Races*, in Collection: *Images du monde*.
- 17) シシリ, 南アルジェリア, スペイン, エジプト, バレアル諸島 (Illes Baléares) など地中海地方を多く旅し, 灌漑の研究 (*L'irrigation : ses conditions géographiques, ses mondes et son organisation dans la Peninsule ibérique et dans l'Afrique du Nord*, 1902. や *Les irrigations en Egypte*, A.G. VI^e année, 1897, pp.456-460. など) やアルジェリアの遊牧, エジプトの村落型あるいはバレアル諸島の地誌などの多くの研究を残している。また, 遠くカナダ, インドシナ, 日本へと足をのばしている。
- 18) なお, 参考書としては注 9 の松尾氏の翻訳があげられるが, 初版本の抄訳書のさらに抄訳したものであるので, 必ずしもプリユースの体系を忠実に伝えているとはいえない。そのうえ誤訳も多いので注意しなければならない。
- 19) 飯塚浩二 (1950) 『人文地理学』, 平凡社, 76-89。
- 20) この問題については, 一レファレンスをあげないが, 地域構造論的研究, 社会地理学的アプローチ, 意志決定の地理学における議論にみるべきものが多い。
- 21) 注12の58-81頁。R. Dickinson (1969) *The makers of modern geography*, Routledge & K. Paul, London, pp.189-228. ブラーシュ (飯塚浩二訳) 『人文地理学原理』(上巻), 岩波書店, 3-22 (解題)。飯塚浩二 (1968) 『地理学方法論』, 古今書院, 8-37, 65-172。
- 22) Vidal de la Blache, P. (1896) Le princlpe de la géographie gégénérale, A.G., V^e année, p.139.
- 23) Le Lannou, M. (古野清人訳) (1953) 『人文地理』, 白水社, 121頁。
- 24) Sorre, M. (松田 信訳) (1968) 『地理学と社会学の接点』, 大明堂, 22頁。
- 25) 野間三郎 (1967) 近代地理学の発達, 木内信蔵・西川 治編 『地理学総論』(朝倉地理学講座) 所収, 朝倉書店, 40-51。
- 26) Juillard, E. et P. Claval (1967) Région et régionalisation, pp.11-13.
- 27) Vidal de la Blache, P. (1911) Les genres de vie dans la géographie humaine (1) A.G., N° 111, p.194.

- 28) Vidal de la Blache, P. (1902) Les conditions géographiques des faits sociaux, *A.G.*, N° 55, p.14.
- 29) Gottmann, J. (1947) De la méthode d'analyse en géographie humaine, *A.G.*, N° 301, p.3. 彼は、この概念が一般地理学への展望を欠いているとして批判している。この概念の展開は, Sorre, M. (1952) *Les fondements de la géographie humaine*, III. *L'habitat*, Librairie Armand Colin, Paris, pp.11-37. にみられる。松田 信 (1962) 生活様式論再考, *人文地理*, 13-6, 1-28。松田 信 (1965) 景観と生活様式, *人文地理*, 17-2, 1-21参照。
- 30) 松田 信 (1959) フランス学派の地域観, *人文地理*, 10-5・6, 111-118。注26の17-20。
- 31) Vidal de la Blache, P. (1913) Des caractères distinctifs de la géographie humaine, *A.G.*, N° 124. pp.289-293.
- 32) Brunhes, J. (1913) Du caractère propre et du caractère : complexe des faits de géographie humaine, *A.G.*, N° 121. この論文は注14の41-71にもほぼ同様の体裁で採用されている。
- 33) Vidal de la Blache, P. (1898) La géographie politique : A propos des écrits de M. Frédéric Ratzel, *A.G.*, N° 32, pp.99-104.
- 34) Vidal de la Blache, P. (1911) Les genres de vie dans la géographie humaine II, *A.G.*, N°112, pp.303-304.
- 35) A. Demangeon, M. Sorre といった人々により継承・発展された。
- 36) Febvre, L. (1922) *La terre et l'évolution humaine*, La Renaissance du Livre, Bruxelles, p.25, pp.31-38. なお, 本書はフェーブール (飯塚浩二訳) (1941) 『大地と人類の進化』(上巻), 岩波書店, として部分的に翻訳されている。
- 37) Tatham, G. (1951) Environmentalism and possibilism, in G. Taylor (ed.) *Geography in the 20th century*, Methuen, London, pp.128-162. 特に151頁。その他に76-89。
- 38) 当時のタルド (G. Tarde), ラ・コンブ (La Combe), ル・ボン (Le Bon) らフランスの心理的社会学派の影響を受けているか否かについては不明であるが, 社会過程を心理的に認識する方法に, 彼の“心理的要素”と一脈通ずるものがある。あるいは, 民族学や H. Bergson を通じて入ってきたのかもしれない。
- 39) 飯塚氏の批判が, それらの一切を踏まえううえで, なおかつブリュエヌの論理的欠陥が心理的要素を個人的なものに, あるいは無時間的・非社会的要素に化してしまうことになることと主張しているのなら, それは筆者の見解に通じる。

なお, この飯塚の主張に対して, 野澤秀樹 (1996, 『フランス地理学の群像』, 地人書房, 125-158) は, ブリュエヌの主張が自然地理的決定論に対するアンチテーゼとして提示されたものであり, “もの” = 自然と人間の係わりを認識するのは人間の心 = 精神であるという主張に基づくものであるとして擁護している。このこと自体は至極当然なことであり, 筆者も同じ見解である。問題は, そもそも人間の心 = 精神をどのようにとらえるのか, 認識主体としての人間の心 = 精神はなにもものにも影響されない個々人の「無垢な心」なのか, 人間の認識作用そのものや, “もの” = 自然と人間の係わりに介在している, あるいはそこに立ち現れる事柄の検討を抜きにして, はたして真実に迫れるのかということである。ブリュエヌがそうした“もの” = 自然と人間の関係における認識・意識作用そのものと, そこに係わってくる諸要素についての厳密な考察を怠っている点にこそ問題があるというのが筆者の見解である。野澤自身が「事実とそれを認識するものとの間の関係を問うことはなかった」(同150頁)と述べている点はまさにそうした点に係わっての指摘ではないのか。

「寒い」, 「暑い」, あるいは「美しい」と感じ, そこにある種の心理作用が生じるのは, まさに個人的な営為である。例えば, 「寒い」・「暑い」という感覚から防寒・避暑という心理作用が働くのが一

般的であろう。しかし、人によっては、あるいは文化によってはそうした感覚を良しとして防寒・避暑とは異なった心理的作用、異なった方向の対処を採ることがあるかもしれない。さらに、「美しい」と観ずる心理作用に至っては多分に属する集団の文化的・社会的精神の反映が見て取れることが大いにあり得る。すなわち、個人的な営為である心理的作用は単なる「無垢な精神」の顕れや作用ではなく、そこに社会や文化の精神が入り込んできたり、時にそうしたものへの反発が心理作用にある種の方向づけをしたりすることがあるということである。ブリュース自身、それを集合的心理作用と呼び、また「自由選択の限界」、「選択の可能性」、「集団的はずみ」について語っているのである（ベルグソン流の「注意の方向」についてもその文脈において語られている）。繰り返しになるが、このようにブリュース自身が心理的作用そのものが歴史・社会・政治との係わりにおいて生じることを認めながら（注10、599頁）、それを深く追求することを避けた点に問題があることを再度指摘しておきたい。なお、野澤は、筆者の「一次的心理要素→基礎的事象→二次的心理連鎖→非基礎的諸事象という一連の検証過程」において人類の社会性や歴史性を考慮に入れながらその因果関係を解き明かすことこそ大切であるという主張を、アプリオリに一連の心理作用・心理的要素への社会的方向付けを指定するものであると受け取っているのは、残念な誤解である。

- 40) Pahl, R. E. (1967) Sociological models in geography, in K. J. Cholley and P. Haggett (eds.) *Models in geography*, Methuen, London, pp.217-242.
- 41) Bergson, H. (1953) 〈平山高次訳〉『道徳と宗教の二源泉』, 岩波書店, 11-50。淡野安太郎 (1958) 『ベルグソン』, 勁草書房, 11-129。